仙台市文化財調査報告書第216集

仙台平野の遺跡群 XVI

――平成８年度発掘調査報告書――
燕沢遺跡第10次調査など

１９９７年３月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第216集

仙台平野の遺跡群 XVI

――平成８年度発掘調査報告書――
燕沢遺跡第10次調査など

１９９７年３月

仙台市教育委員会

序　　文

国庫補助事業として「仙台平野の遺跡群」発掘調査に着手したのは昭和56年度でした。この事業も数えて16年目を迎え、これまで陸奥国分寺跡、国分尼寺跡の国指定史跡の範囲確認調査や郡山遺跡、富沢遺跡などの個人住宅建築に伴う小規模調査を行ってまいりました。今年度は、燕沢遺跡の範囲の確認調査ならびに性格究明のための発掘調査、郡山遺跡の個人住宅建築に伴う発掘調査を実施しました。また土地改良総合整備事業に先立っての成館跡の発掘調査も実施し、本書はそれらの調査成果をまとめたものであります。

当市は平成元年４月に政令指定都市となり、都市整備の充実が急務となってきております。こうした中で、道路整備に関わる総合交通体系の整備事業や区画整理事業を基盤とした町づくりが進められています。一方、民間の小規模開発も増加し、発掘調査件数も漸次増加する傾向にあります。

当市教育委員会では、先人の創造した歴史と文化遺産を次の世代に継承し、生活の中での活用を図っていかなければならない責務を負っています。しかし、こうした文化財の保護活用は、市民の方々の御支援があってこそ、はじめて成果をあげられるものと思います。

今後とも広い視野にたって充実した遺跡保護を行っていくために、精一杯努力してまいる所存でありますので、さらなる御指導、御支援を切にお願い申し上げ、刊行のご挨拶と致します。

平成９年３月

仙台市教育委員会

教育長　堀　籠　克　彦

例　　言

1．本書は平成８年度国庫補助事業である緊急遺跡範囲確認事業に伴う「仙台平野の遺跡群」の発掘調査報告書である。

2．本書の土色については「新版標準土色帖」（小山・佐原：1973）を使用した。

3．実測図中の水糸高は標高である。

4．実測図、本文中の方位は真北を基準としてある。仙台においては、磁北は真北に対して西偏約7°20′である。

5．本文執筆は、長島榮一　Ⅰ、Ⅱ[１]１、豊村幸宏　Ⅱ[１]２、３、[２]１、２、森剛男　Ⅱ[１]２、篠原信彦　Ⅱ[３]が行い、編集は、長島・豊村がこれにあたった。

6．遺構略号は次の通りとした。

ＳＡ　柱列　　ＳＢ　建物跡　　ＳＤ　溝跡・溝状遺構

ＳＩ　住居跡・竪穴遺構　　ＳＫ　土坑　　ＳＸ　性格不明遺構

7．本書中に掲載した発掘調査で出土した遺物及び遺構・遺物の実測図は、全て仙台市教育委員会が保管している。

8．今年度事業は平成８年４月に着手し、平成９年３月に終了した。

目　　次

序文
例言

Ⅰ　調査計画と実績……1
Ⅱ　発掘調査報告

［1］燕沢遺跡―第10次調査―
1．調査経過……3
2．発見遺構と出土遺物
Ⅰ区……5
ⅡA区……16
ⅡB区……16
3．まとめ……19
写真図版……22

［2］郡山遺跡
1．位置と環境……29
2．調査概要
第114次調査……29

［3］成館跡
1．調査に至る経過……31
2．調査要項……31
3．遺跡の位置と環境……31
4．調査の方法……33
5．調査の概要……33
6．まとめ……35
写真図版……36

Ⅰ　調査計画と実績

仙台市は昭和62年に宮城町、昭和63年に泉市、秋保町と合併し、明治22年の市制施行以来100周年にあたる平成元年に、全国11番目の政令指定都市に移行した。さらに市営地下鉄の開業や延長、仙台空港の国際化、高速道路網の充実によって著しい都市化が進む状況になってきている。旧仙台市域では辛うじて残っていた農地も急速に宅地になり、緑ゆたかであった郊外の丘陵地も開発の予定が表明される時世となっている。

仙台市内の遺跡一埋蔵文化財包蔵他一は約700箇所に達するが、日々変化する社会の中で現状のまま将来に残し、伝えていくのはきわめて困難である。このような中で開発に対応した発掘調査だけではなく、事前に遺跡の範囲と性格究明を目的とした発掘調査を実施して行くことが、今後の遺跡保護に重要と考えられる。また遺跡内での個人住宅や木造の共同住宅建築のような小規模開発に伴う発掘調査も必要に応じ実施し継続していくことが、遺跡の範囲確認や遺構の在り方を検討するうえでも有用と考えられる。それらを目的として当市教育委員会では昭和56年度より国の補助を受け、「仙台平野の遺跡群」の発掘調査を実施してきた。これまで郡山遺跡をはじめ、陸奥国分寺跡、陸奥国分尼寺跡、仙台城巽門跡、大年寺惣門、長町駅東遺跡（長町貨物ヤード跡地）で発掘調査を実施し、大きな成果をあげている。

今年度は燕沢遺跡と郡山遺跡で発掘調査を実施した。燕沢遺跡は平成５年度から継続的に調査し、今年度で4年次目になる。昨年の第9次調査では平安時代の建物跡を発見し、寺院の中心的な建物跡と考えられる遺構を発見した。今年度はその西に隣接した地区で、寺院に関連した建物跡を発見する目的で調査を実施した。また郡山遺跡では個人住宅建設に伴っての小規模な発掘調査（第114次）を実施した。なお郡山遺跡での発掘調査については、仙台市文化財調査報告書第215集「郡山遺跡ⅩⅦ―平成８年度発掘調査概報―」に詳細に記述し、本報告では概要を載せるにとどめている。

また今年度は青葉区芋沢の本沢上地区で計画されている土地改良総合整備事業に先立って、同地区内に所在する成館跡で発掘調査を実施した。その調査費用の一部を負担し、調査成果を合わせて掲載している。

１．目　　的　仙台平野に分布する遺跡群の範囲、性格究明のための発掘調査

２．調査面積　400㎡

３．調査期間　平成８年４月～12月

４．調査体制

調査主体　仙台市教育委員会

調査担当　仙台市教育委員会文化財課

課長　小井川和夫

調査第一係　係長　田中則和　　主査　木村浩二　　主事　長島榮一

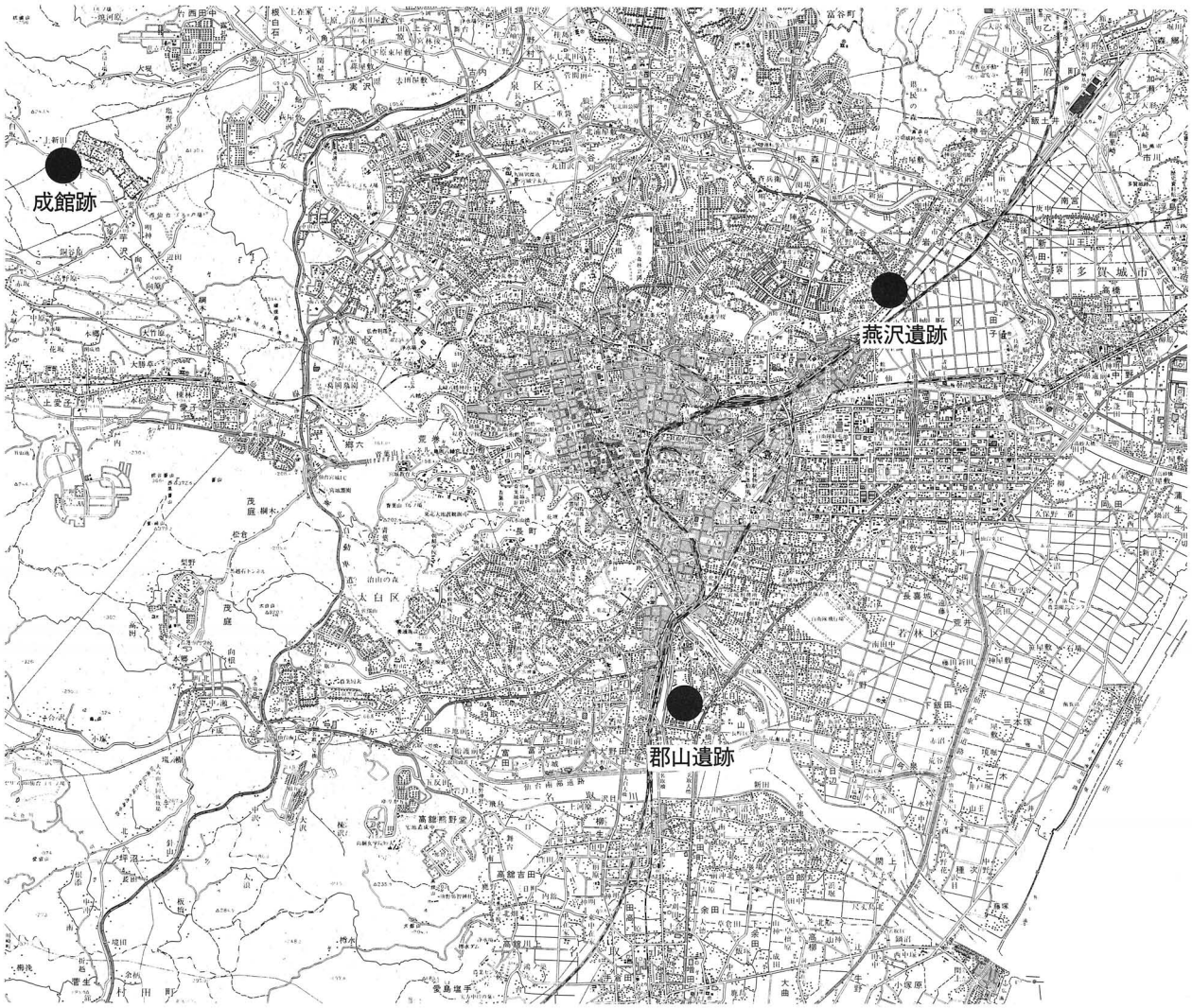
文化財教諭　豊村幸宏　　嘱託　森剛男

調査第二係　係長　結城慎一　　主査　篠原信彦

管理係　　係長　千葉晴洋　　主事　福井健司　　主事　佐藤美弥子

調査実績表

調査地	所在地	申　請　者	調査事由	対象面積	調査面積	調　査　期　間
燕沢遺跡	宮城野区燕沢東 三丁目526他	仙台市教育委員会教育長 堀籠克彦	範囲確認	520㎡	400㎡	平成８年４月22日 ～６月24日
郡山遺跡	太白区郡山 三丁目23－８	太白区郡山三丁目23－８ 伊藤みさほ	個人住宅建築	10㎡	10㎡	平成８年12月９日
成館跡	青葉区芋沢字駒込	仙台市教育委員会教育長 堀籠克彦	土地改良総合整備事業	13,000㎡	140㎡	平成８年11月５日 ～11月15日



第１図　遺跡位置図

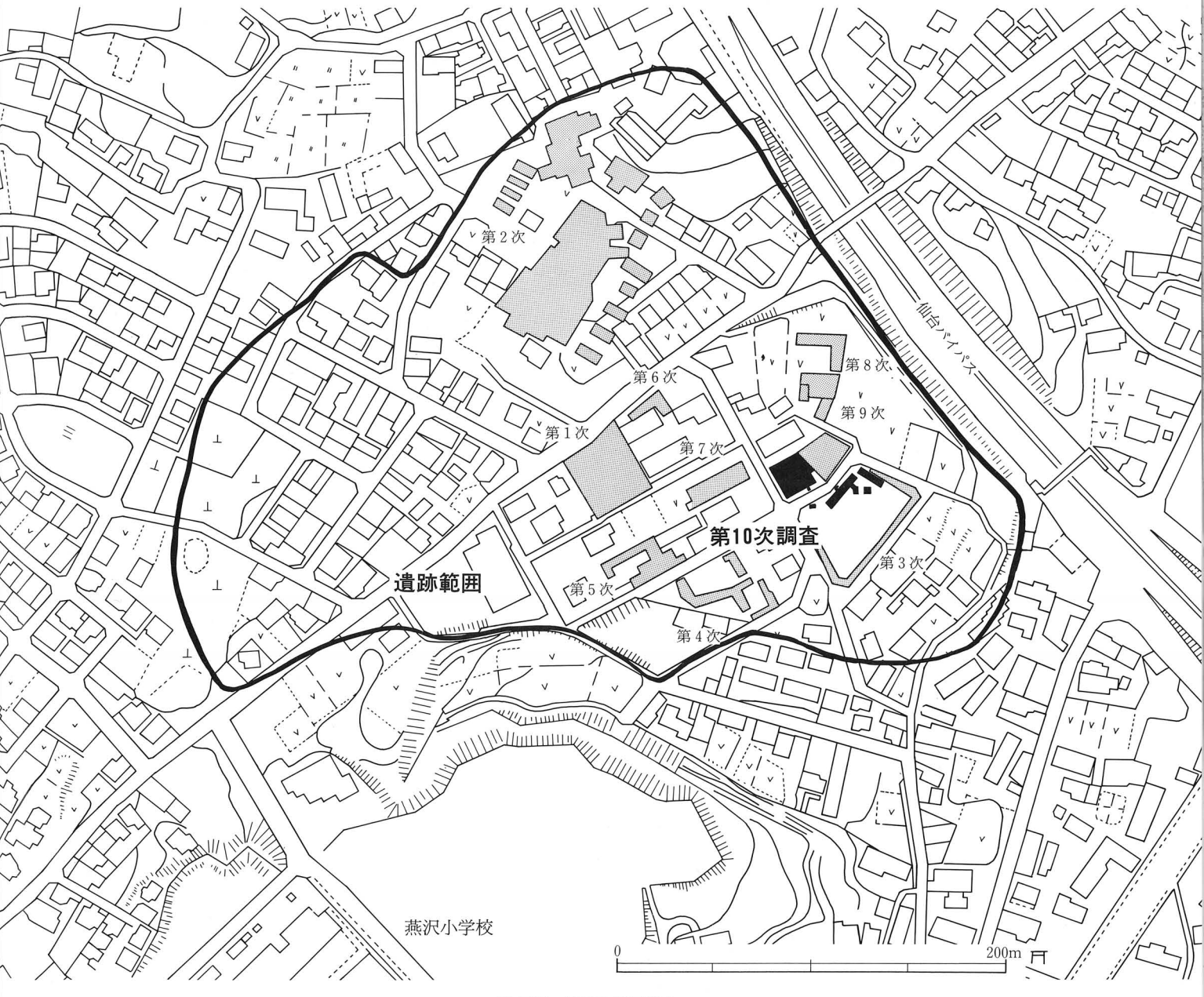
II　発掘調査報告

［1］　燕沢遺跡－第10次調査－

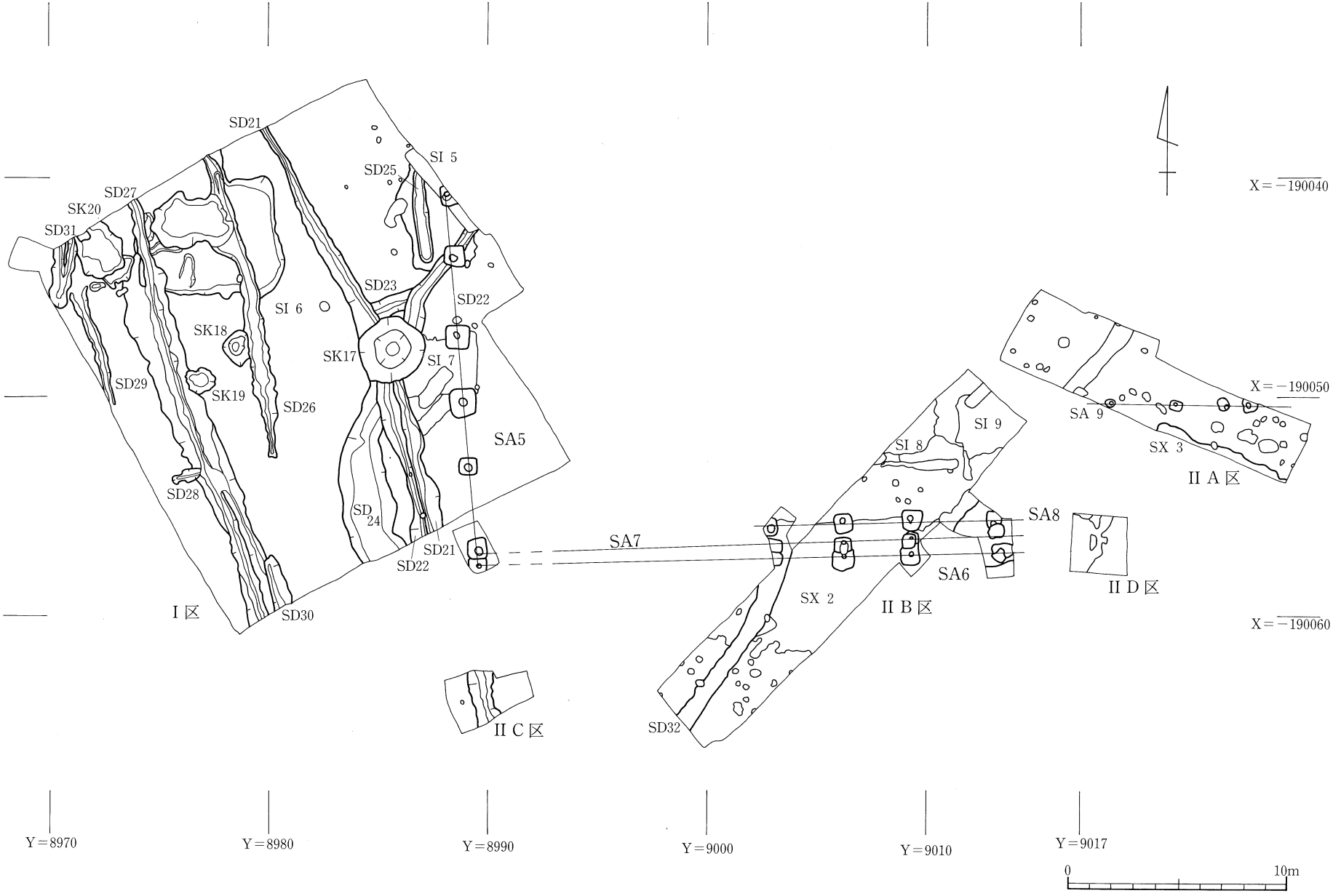
1．調査経過

平成5年度の第7次調査より、遺跡内の最も標高の高い平坦地で発掘調査を実施している。今年度は昨年度の第9次調査の西側と南側に、3箇所の調査区を設定して発掘調査を実施した。I区は第9次調査で寺院の中心的な建物跡と推定したSB3掘立柱建物跡の西側で、関連する遺構が存在するかどうかを明らかにする目的で設定した。第9次調査ではSB4掘立柱建物跡とした柱穴が既に発見されており、その延長部が検出されることが想定され、どのような建物跡になるかが注目された。II区はSB3掘立柱建物跡の南側に門跡などの遺構の有無を明らかにする目的で設定した。また調査中に遺構の様相を把握するため、小規模な調査区を3箇所追加設定した。

発掘調査は4月22日から実施し、遺構の概要が明らかとなった6月7日に周辺の住民を対象にした説明会を実施した。野外における発掘調査が終了したのは6月24日であった。



第2図　調査区位置図



第 3 図　燕沢遺跡遺構配置図

2．発見遺構と出土遺物

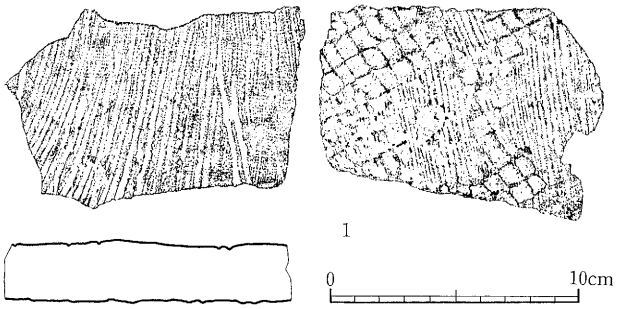
第10次調査で発見された遺構は、柱列５列、溝跡10条、竪穴遺構５基、土坑６基、性格不明遺構３基、小柱穴、ピットなどである。これらの遺構は、畑の耕作土（基本層位第Ⅰ層）の直下の第Ⅱａ層で検出されている。

遺構番号と遺物番号については第７次調査からの継続番号であり、第１次調査から第６次調査までとは区別している。また、遺構の中には検出したにとどめ、掘り込まなかったものもあり、詳細の明らかでない遺構は記載を略している。

○Ⅰ区

ＳＡ５柱列　調査区の東半をほぼ南北方向に延びる柱列である。総長は16.5mと推定され、柱間寸法は296～360cm、方向はＮ－4.5°－Ｗである。柱穴は掘り方が一辺75～123cm×80～115cmの隅丸方形で、柱痕跡は直径30～40cmの円形である。柱穴の深さは遺構を検出した上面より30～37cmほどである。掘り方の埋め土は、黄褐色粘土質シルト、黒褐色、暗褐色粘土で、焼土や炭化物を少量含んでいる。南端の柱穴のみ建替えがあり、ⅡＢ区で検出したSA6、7柱列と接続する可能性がある。

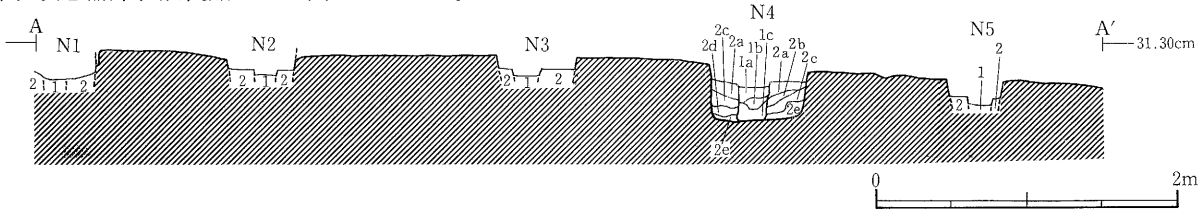
SI5、7竪穴遺構を切り、SD22溝跡に切られている。



図版番号	登録番号	種別器形	出土地点 地区	出土地点 遺構	特徴	備考	写真図版
1	G－52	熨斗瓦	Ⅰ区	SA－5	凸面格子叩き→ハケメ,凹面布目痕→ナデ		11－1

第４図　SA ５柱列出土遺物

［出土遺物］　柱穴の掘り方埋め土よりＧ－52熨斗瓦(第４図１)、土師器坏片、甕片、赤焼き土器高台付坏片、坏片、須恵器片、鉄製品などが出土している。



層位	土色	土性	備考
Ｎ１			
1	N5/0　灰色	粘土	
2	10 YR4/2　灰黄褐色	粘土	黄橙色粘土を斑状に含む
Ｎ２			
1	10 YR3/2　黒褐色	粘土	
2	10 YR3/3　暗褐色	粘土質シルト	礫を含む
Ｎ３			
1	10 YR4/2　灰黄褐色	粘土質シルト	大きい礫１点含む
2	10 YR3/3　暗褐色	粘土質シルト	礫を多量に含む
Ｎ４			
柱痕跡			
1ａ	10 YR3/3　暗褐色	粘土	
1ｂ	10YR3/3　暗褐色	粘土	粘性が１ａよりある
1ｃ	10YR3/1　黒褐色	粘土	礫を含む
掘り方埋め土			
2ａ	2.5Y5/4　黄褐色	粘土質シルト	礫を多量に含む
2ｂ	2.5Y5/3　黄褐色	粘土質シルト	２ａより黄褐色粘土粒を含む
2ｃ	2.5Y5/4　黄褐色	粘土質シルト	大礫を多量に含む
2ｄ	10YR2/1　黒色	粘土	焼土・炭化物を多量に含む
2ｅ	10YR3/3　暗褐色	粘土	礫を含む
Ｎ５			
1	10YR4/4　褐色	粘土質シルト	炭化物を少量含む
2	10YR5/3　灰黄褐色	粘土質シルト	礫を多量に含む

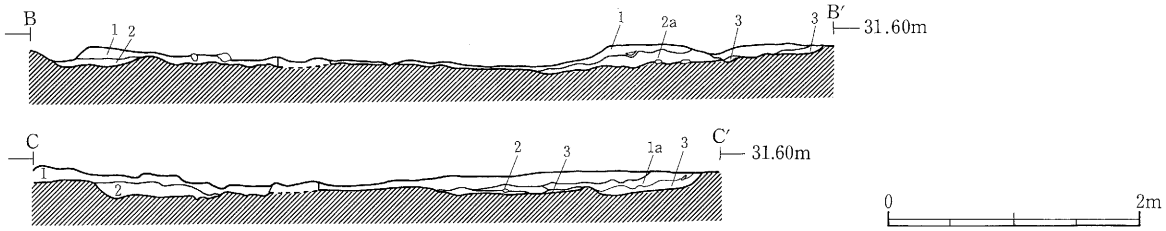
第５図　SA ５柱列断面図

ＳＩ５竪穴遺構　調査区の北東端で検出した遺構である。東西3.0m、南北4.8m以上で、不整形と推定される。昨年の第９次講査区では残存する深さが20～40cmで、壁は緩やかに立ち上がっている。底面はほぼ平坦であったが、中心部分に向かってきわめて緩やかに傾斜していた。堆積土は暗褐色シルトであった。

ＳＡ５柱列、ＳＤ22、25溝跡に切られている。

ＳＩ６竪穴遺構　調査区の北部で検出した遺構である。東西6.5m、南北5.3mで、不整形である。残存する深さは６～19cmで、底面は凹凸が著しく一定していない。壁は緩やかに立ち上がる。堆積土は暗褐色、黒褐色シルト質粘土で、摩滅の著しい土器や瓦、礫などを含んでいる。

ＳＤ26、27溝跡に切られている。



層位	土　色		土　性	備　考
1	10 YR3/3	暗褐色	粘土質シルト	土器片及び瓦・多量の礫を含む
1 a	10 YR3/3	暗褐色	粘土質シルト	明黄褐色地山土を小ブロック状に含む
2	7.5 YR3/2	黒褐色	シルト質粘土	多量の炭化粒を含み、少量の礫及び土器片を含む
2 a	7.5 YR3/4	暗褐色	粘土質シルト	多量の瓦・土器片・礫を含む
3	10 YR5/6	黄褐色	シルト質粘土	明黄褐色土をを粒状に多量に含む

第６図　SI ６竪穴遺構断面図

［出土遺物］　堆積土中より土師器Ｄ－67～77坏（第７図１～８）、須恵器Ｅ－14坏、15壺（第７図10）、16壺（第７図11）、17壺（図版11－17）、20坏（第７図９）、24不明品（図版13－12）、Ｆ－24歯車文軒丸瓦（第８図1）、Ｇ－47均整唐草文軒平瓦（第８図２）、51均整唐草文軒平瓦（第８図５）、61均整唐草文軒平瓦（第８図３）、63均整唐草文軒平瓦（第８図４）、椀型滓とみられるＮ―７鉄滓（第８図６）、Ｎ－４、５、６鉄滓（図版13-14、15、16）、石器Ｋ－20スクレイパー（図版13－21）が出土している。

ＳＩ７竪穴遺溝　調査区の東部で検出した遺構である。東西3.4m、南北2.8mで、隅丸長方形である。方向は東辺で真北方向である。

ＳＡ５柱列、ＳＫ17土坑、ＳＤ21、22溝跡に切られている。

ＳＤ21溝跡　総長はＩＩＣ区を含めて19.7m以上で、南北方向に延びる溝跡である。上幅30～125cm、下幅10～50cm、深さ７～14cmで、壁は緩やかに立ち上がり、断面形はＵ字形である。底面はほぼ平坦である。方向はＮ－32°－Ｗで、堆積土は暗褐色粘土質シルトである。

ＳＤ23溝跡、ＳＩ７竪穴遺構を切り、ＳＤ22溝跡、ＳＫ17土坑に切られている。

［出土遺物］　堆積土中より丸瓦片２点、平瓦片３点が出土している。

ＳＤ22溝跡　総長12.2mほどの湾曲しながら斜面下方に延びる溝跡である。上幅35～113cm、下幅６～40cm、深さ３～15cmで、壁は緩やかに立ち上がり、断面形は扁平なＵ字形である。底面はほぼ平坦である。堆積土は暗褐色粘土質シルトである。第９次調査区で検出したＳＤ17溝跡の延長部である。

ＳＤ21、23、24溝跡、ＳＩ７竪穴遺構を切り、ＳＡ５柱列に切られている。

［出土遺物］　堆積土中より須恵器Ｅ－23甕片（第13図４）、坏片、須恵器坏片、赤焼き土器高台付坏片、丸瓦片、平瓦片、縄文土器の小片が出土している。

ＳＤ23溝跡　総長2.0mで、ほぼ東西方向に延びる溝跡である。上幅80cm、下幅10～25cm、深さ５～10cmで、断面形はＵ字形である。底面には凹凸がある。方向はＥ－20°－Ｎである。

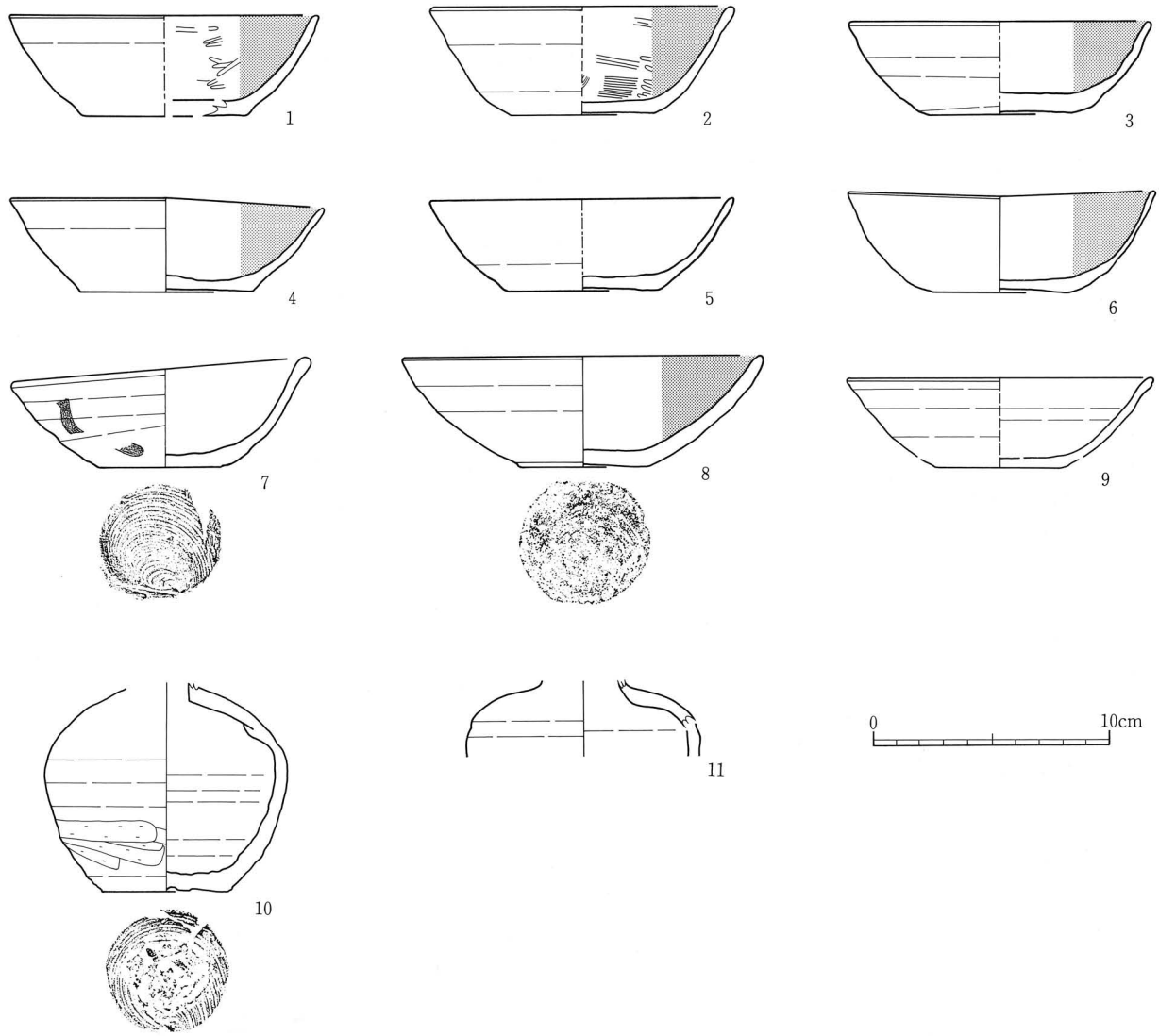
ＳＤ21、22溝跡、ＳＫ17土坑に切られている。

［出土遺物］　遺物は出土しなかった。

ＳＤ24溝跡　総長8.3mほどの湾曲しながら斜面下方に延びる溝跡である。上幅140～250cm、下幅45～140cm、深さ９～15cmで、壁は緩やかに立ち上がり、断面形は扁平な舟底形である。底面には段差があり、東側が低くなっている。推積土は暗褐色、褐色粘土質シルトで、礫を多量に含んでいる。北半部は検出されなかったが、ＳＤ22溝跡と連続する可能性がある。ＳＤ21溝跡、ＳＫ17土坑に切られている。

［出土遺物］　堆積土中より土師器坏片、須恵器甕片、壺片、丸瓦片、平瓦片が出土している。

ＳＤ25溝跡　総長4.15mほどの南北方向に延びる溝跡である。上幅50～70cm、下幅30～40cm、深さ５～12cmで、壁は直立気味に立ち上がり、断面形はＵ字形である。底面はほぼ平坦である。方向はＮ－6.5°－Ｗで、堆積土は褐色



図版番号	登録番号	種別・器形	出土地点			法量(cm)			外面調整			内面調整			備考	写真図版
			地区	遺構	層位	器高	口径	底径	口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部		
1	D−68	土師器・坏	Ⅰ区	SI− 6	1層	4	13.2	7	ロクロナデ		回転糸切り	ミガキ・黒色処理				11− 5
2	D−69	土師器・坏	Ⅰ区	SI− 6	2層	4.6	13.0	6.2	ロクロナデ		回転糸切り	ミガキ・黒色処理			付着物あり	11− 6
3	D−71	土師器・坏	Ⅰ区	SI− 6	1層	4.05	12.9	6	ロクロナデ		回転糸切り	黒色処理				11− 8
4	D−74	土師器・坏	Ⅰ区	SI− 6	1層	4.4	13.1	7.4	ロクロナデ		回転糸切り	ミガキ・黒色処理				11−11
5	D−76	土師器・坏	Ⅰ区	SI− 6		3.9	13.0	6.6	ロクロナデ		回転糸切り	ロクロナデ				11−13
6	D−77	土師器・坏	Ⅰ区	SI− 6		4.9	13.2	5.8	ロクロナデ			ミガキ・黒色処理			磨滅が著しい	11−14
7	D−67	土師器・坏	Ⅰ区	SI− 6	1層	4.7	12.8	5.4	ロクロナデ		回転糸切り	ロクロナデ			付着物あり	11− 4
8	D−75	土師器・坏	Ⅰ区	SI− 6	1層	4.7	15.4	5.6	ロクロナデ		回転糸切り	ミガキ・黒色処理				11−12
9	E−20	須恵器・坏	Ⅰ区	SI− 6	2層	3.8	13.0	5.6	ロクロナデ		回転糸切り	ロクロナデ				11−18
10	E−15	須恵器・壺	Ⅰ区	SI− 6	1・2層	8.9		5.4	ロクロナデのちヘラケズリ		回転糸切り	ロクロナデ				11−15
11	E−16	須恵器・壺	Ⅰ区	SI− 6	2層				ロクロナデ			ロクロナデ				11−16

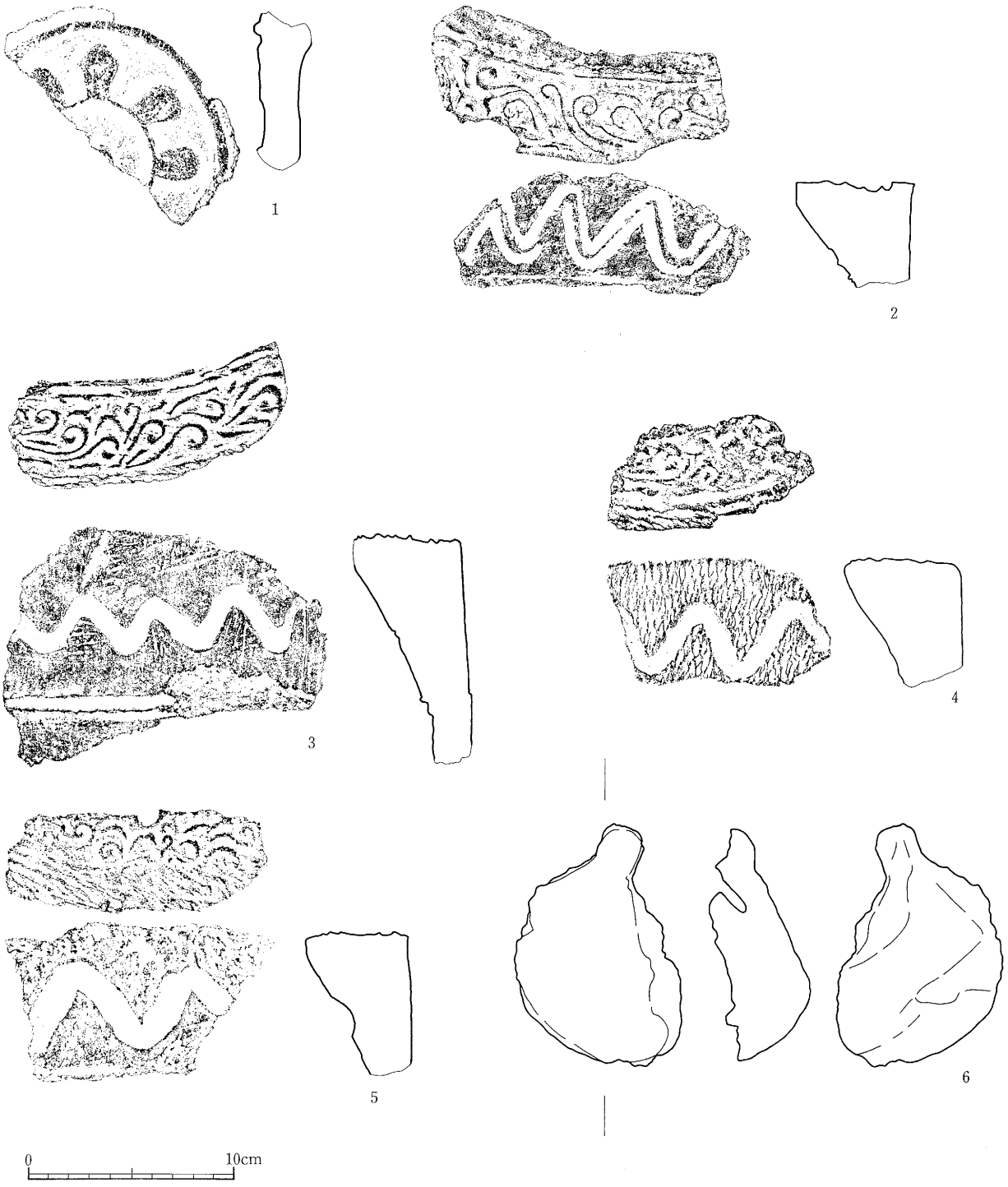
第7図　SI 6竪穴遺構出土遺物（1）

粘土質シルトで、炭化物を少量含んでいる。ＳＡ５柱列とほぼ平行している。

ＳＩ５竪穴遺構を切っている。

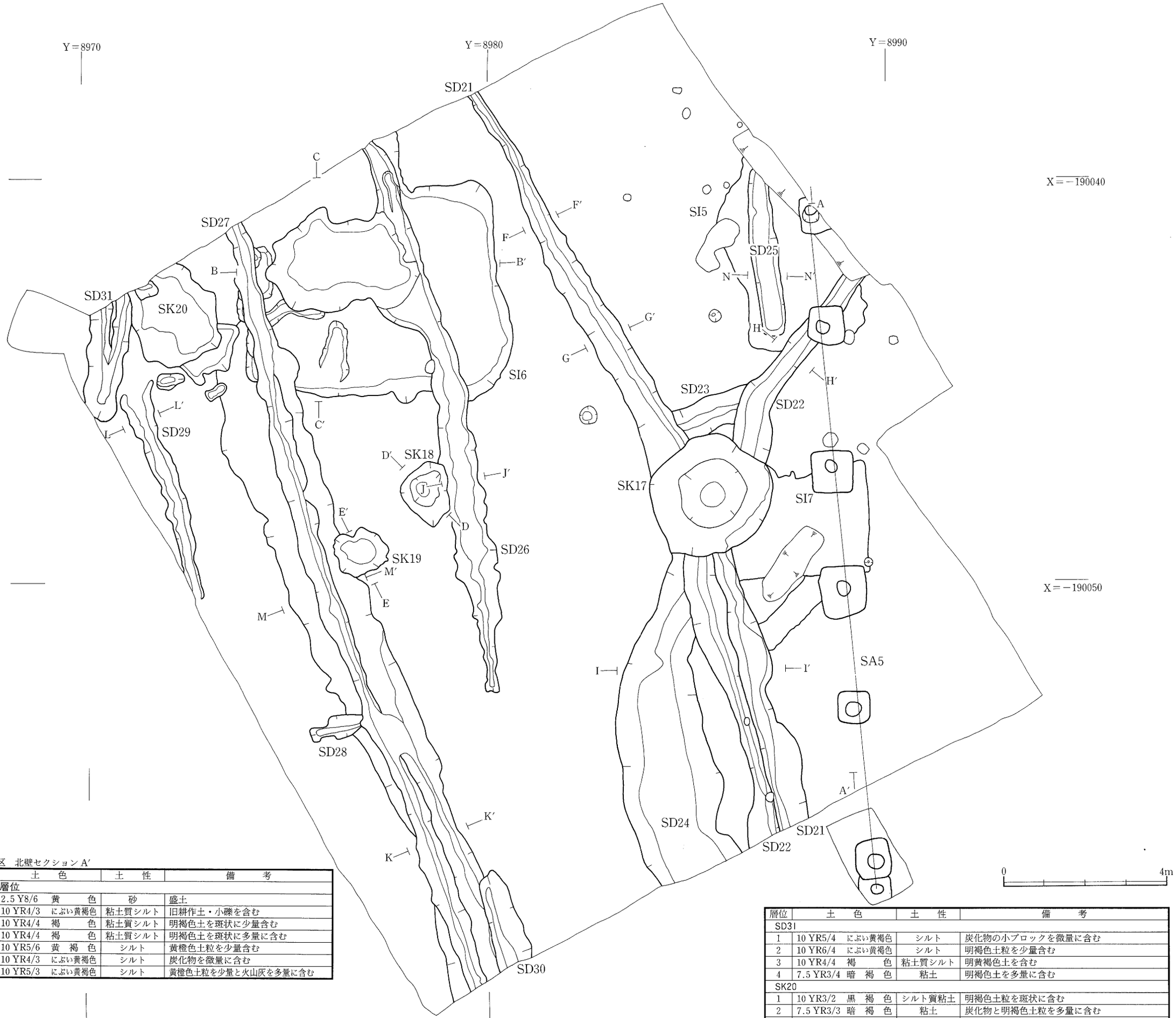
［出土遺物］　堆積土中より土師器坏片、甕片、須恵器坏片、甕片、赤焼き土器坏片、丸瓦片、平瓦片が出土している。

ＳＤ26溝跡　総長14m でほぼ南北方向に延びる溝跡である。上幅40～95cm、下幅10～50cm、深さ７～９ cm で、壁は緩やかに立ち上がり、断面形はやや歪んだ舟底形である。底面はほぼ平坦である。方向はN―4.5°－W で、堆



図版番号	登録番号	種別 器形	出土地点 地区	遺構	層位	特徴	備考	写真図版
1	F－24	軒丸瓦	Ⅰ区	SI－6	2層	歯車文		11－19
2	G－47	軒平瓦	Ⅰ区	SI－6	1層	均整唐草文		11－20
3	G－61	軒平瓦	Ⅰ区	SI－6	1層	均整唐草文		11－22
4	G－63	軒平瓦	Ⅰ区	SI－6	1層	均整唐草文	磨滅が著しい	11－23
5	G－51	軒平瓦	Ⅰ区	SI－6	1層	均整唐草文	磨滅が著しい	11－21
6	N－7	鉄　滓	Ⅰ区	SI－6	1層	縦11.8cm　横8.1cm　厚さ3.8cm	塊形滓	12－1

第8図　SI 6竪穴遺構出土遺物（2）



第9図　Ⅰ区平・断面図

Ⅰ区　北壁セクションA′

層位	土色	土性	備考
基本層位			
Ⅰa	2.5 Y8/6　黄　色	砂	盛土
Ⅰb	10 YR4/3　にぶい黄褐色	粘土質シルト	旧耕作土・小礫を含む
Ⅰe	10 YR4/4　褐　色	粘土質シルト	明褐色土を斑状に少量含む
Ⅰf	10 YR4/4　褐　色	粘土質シルト	明褐色土を斑状に多量に含む
Ⅰg	10 YR5/6　黄褐色	シルト	黄橙色土粒を少量含む
Ⅱa	10 YR4/3　にぶい黄褐色	シルト	炭化物を微量に含む
Ⅱb	10 YR5/3　にぶい黄褐色	シルト	黄橙色土粒を少量と火山灰を多量に含む

層位	土色	土性	備考
SD31			
1	10 YR5/4　にぶい黄褐色	シルト	炭化物の小ブロックを微量に含む
2	10 YR6/4　にぶい黄褐色	シルト	明褐色土粒を少量含む
3	10 YR4/4　褐　色	粘土質シルト	明黄褐色土を含む
4	7.5 YR3/4　暗褐色	粘土	明褐色土を多量に含む
SK20			
1	10 YR3/2　黒褐色	シルト質粘土	明褐色土粒を斑状に含む
2	7.5 YR3/3　暗褐色	粘土	炭化物と明褐色土粒を多量に含む
3	7.5 YR3/2　黒褐色	粘土	炭化物をブロック状に明褐色土粒を多量に含む
Pit 5			
1	10 YR3/4　暗褐色	シルト質粘土	炭化物と明褐色土粒を含む
SD27			
1	10 YR4/4　褐　色	シルト	明黄褐色土の極小粒を微量に含む
SI 6			
1	10 YR4/4　褐　色	シルト	炭化物を小ブロック状に少量含む　火山灰を含む
2 a	10 YR3/4　暗褐色	粘土質シルト	炭化物を中ブロック状に含む
2 b	10 YR3/2,　黒褐色	粘土質シルト	炭化物を中ブロック状に多量に含む
3	10 YR4/4　褐　色	粘土質シルト	明褐色土を斑状に多量に含む
Pit 6			
1	7.5 YR4/2　灰褐色	粘土	明褐色地山土をブロック状に含む

積土は褐色粘土質シルトである。

ＳＩ６竪穴遺構、ＳＫ18土坑を切っている。

［出土遺物］　堆積土中より須恵器Ｅ－18甕片（図版13－13）、Ｆ－29細弁蓮華文軒丸瓦（第12図１）、Ｆ－31歯車文軒丸瓦（第12図２）、Ｇ－54均整唐草文軒平瓦（第12図４）、55均整唐草文軒平瓦（第12図５）、56均整唐草文軒平瓦（図版12－５）、Ｎ－3鉄滓（図版12－６）、石器Ｋ－21剝片（図版13－20）や、土師器、須恵器、瓦の小片が多量に出土している。

ＳＤ27溝跡　総長20mでほぼ南北方向に延びる溝跡である。上幅50～220cm、下幅15～30cm、深さ10cmで、壁は直立気味に立ち上がったのち、きわめて緩やかになる。断面形は扁平な舟底形である。底面は平坦である。方向はＮ－13°－Ｗで、堆積土は褐色シルト質粘土で、礫を含んでいる。南半で二条に分岐する。

ＳＤ30溝跡、ＳＫ19土坑、ＳＩ６竪穴遺構を切り、ＳＤ28溝跡に切られている。

［出土遺物］　堆積土中より土師器坏片、甕片、須恵器甕片、壺片、瓦片などが出土している。

ＳＤ28溝跡　総長1.4mでほぼ東西方向に延びる溝跡である。上幅60～85cm、下幅10～25cm、深さ５～12cmで、壁は緩やかに立ち上がり、断面形は逆台形である。底面は平坦である。方向はＮ－24°－Ｗで、堆積土は黄褐色粘土質シルトである。

ＳＤ27、30溝跡を切っている。

［出土遺物］　遺物は出土しなかった。

ＳＤ29溝跡　総長5.5mでほぼ南北方向に延びる溝跡である。上幅40～70cm、下幅12～30cm、深さ５cmで、壁はきわめて緩やかに立ち上がり、断面形は扁平なＵ字形である。底面は平坦である。方向はＮ－15°－Ｗで、堆積土は褐色粘土質シルトである。

［出土遺物］　遺物は出土しなかった。

ＳＤ30溝跡　総長2.4mでほぼ南北方向に延びる溝跡である。上幅55～90cm、下幅10～30cm、深さ13～22cmで、壁は緩やかに立ち上がり、断面形はＵ字形である。底面はほぼ平坦である。方向はＮ－12°－Ｗで、堆積土は黄褐色シルト質粘土である。

ＳＤ27、28溝跡を切っている。

［出土遺物］　堆積土中より土師器坏片、須恵器甕片、壺片、瓦片が出土している。

ＳＤ31溝跡　総長2.9mでほぼ南北方向に延びる溝跡である。北半では二条に分岐している。上幅80～100cm、下幅〔北半東〕15cm、〔北半西〕10～30cm、〔南半〕23cm、深さ12～23cmで、壁は緩やかに立ち上がり、断面形は南半ではＵ字形である。底面は平坦である。方向はＮ－5°－Ｅで、堆積土は黄褐色シルト、褐色、暗褐色粘土質シルトなどである。

ＳＫ20を切っている。

［出土遺物］　堆積土中からＧ－53均整唐草文軒平瓦（図版12－８）が出土している。

ＳＫ17土坑　南北300cm、東西300cmのほぼ円形の土坑で、深さは110cmである。底面は摺り鉢状を呈している。

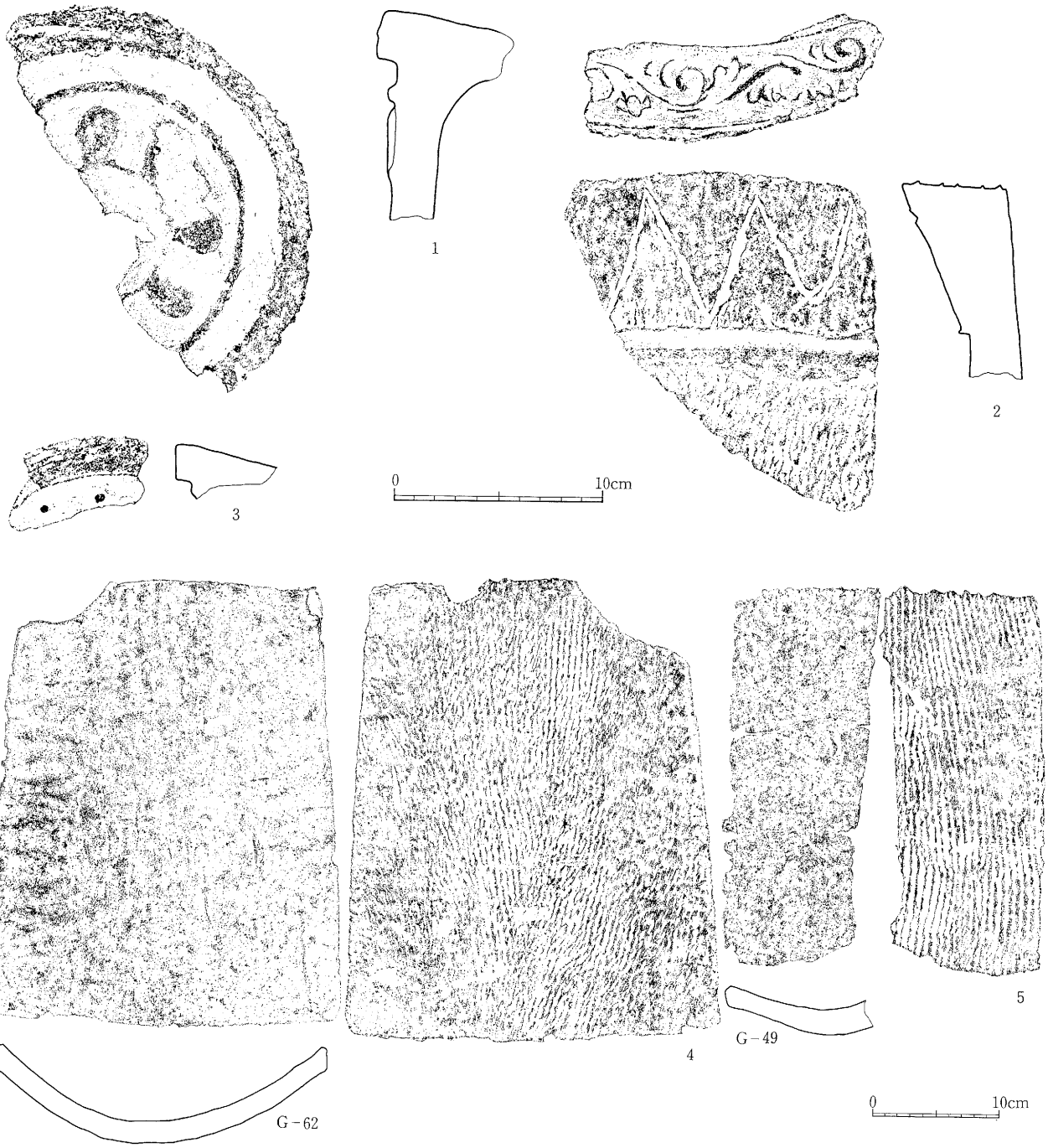
ＳＤ21、22、23、24溝跡、ＳＩ７竪穴遺構を切っている。

［出土遺物］　堆積土中よりＦ－25歯車文軒丸瓦（第13図５）、Ｇ－48均整唐草文軒平瓦（図版12－11）、土師器坏片、須恵器坏片、甕片、壺片、丸瓦片、平瓦片が多量に出土している。

ＳＫ18土坑　南北160cm、東西117cmの不整楕円形の土坑で、深さは30cmである。底面は摺り鉢状を呈している。堆積土は褐色粘土質シルトである。

ＳＤ26溝跡に切られている。

［出土遺物］　堆積土中よりＦ－26歯車文軒丸瓦（第10図１）、32細弁蓮華文軒丸瓦（第10図３）、Ｇ－49平瓦（第



図版番号	登録番号	種別器形	出土地点 地区	出土地点 遺構	特徴	備考	写真図版
1	F－26	軒丸瓦	Ⅰ区	SK－18	歯車文		12－12
2	G－50	軒平瓦	Ⅰ区	SK－18	均整唐草文　凸面縄叩き→ナデ→鋸歯文　凹面布目痕		13－1
3	F－32	軒丸瓦	Ⅰ区	SK－18	細弁蓮華文		12－13
4	G－62	平　瓦	Ⅰ区	SK－18	凸面縄叩き、凹面布目痕		12－15
5	G－49	平　瓦	Ⅰ区	SK－18	凸面縄叩き→ナデ、凹面→スリケシ		12－14

第10図　SK18 土坑出土遺物

10図５）、50均整唐草文軒平瓦（第10図２）、62平瓦（第10図４）や、土師器坏片、甕片、丸瓦片、平瓦片が出土している。

ＳＫ19土坑　南北115cm、東西135cmの不整楕円形の土坑で、深さは10cmである。底面は平坦である。堆積土は褐色粘土質シルト、黄褐色シルト質粘土などで、炭化物や礫を多量に含んでいる。

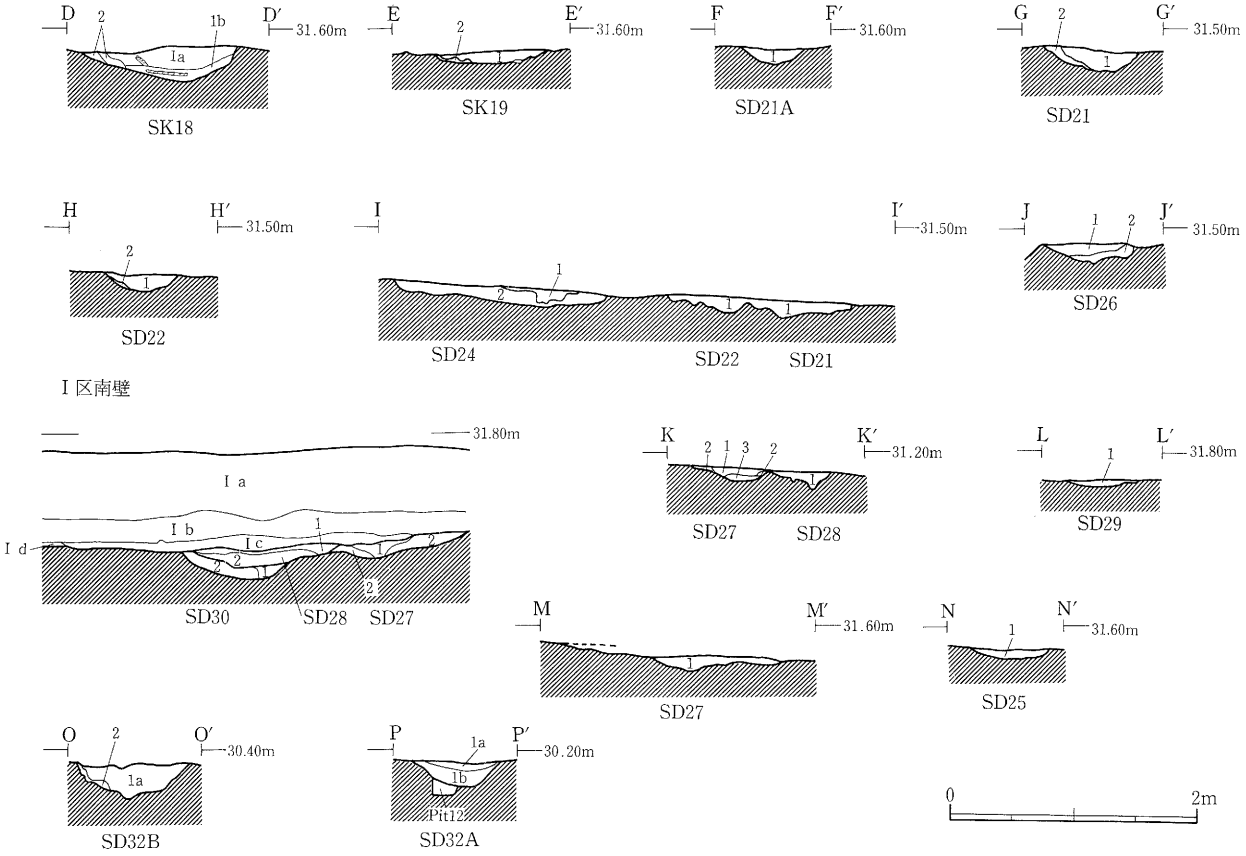
ＳＤ27溝跡に切られている。

［出土遺物］　堆積土中よりＦ－27重弁蓮華文軒丸瓦（図版13－２）や土師器坏片、平瓦片が各１点出土している。

ＳＫ20土坑　南北250cm以上、東西212cmの不整楕円形の土坑で、深さは12～30cmである。底面はほぼ平坦である。堆積土は黒褐色シルト質粘土などである。

ＳＤ31溝跡に切られている。

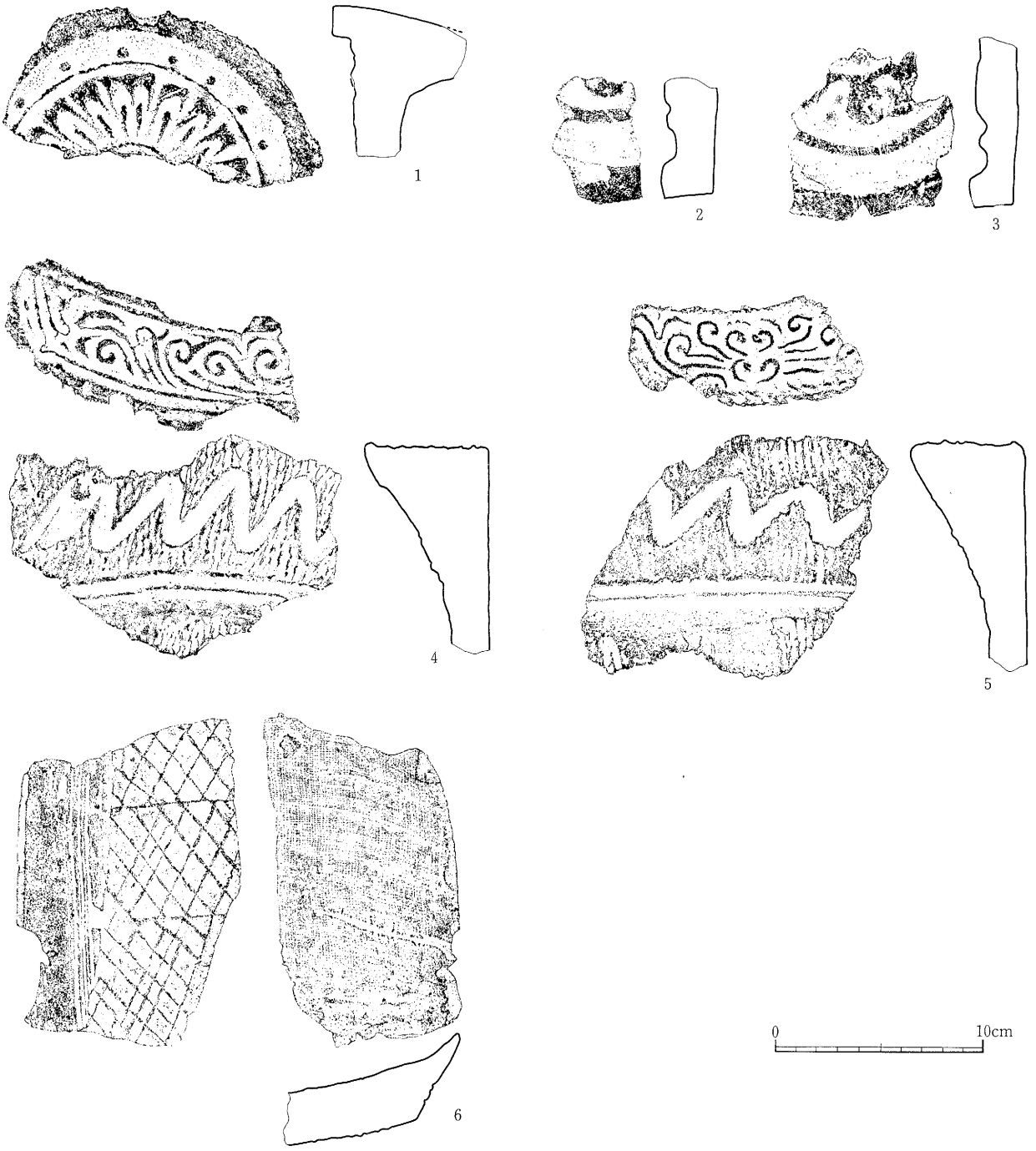
［出土遺物］　堆積土中より土師器坏片、須恵器甕片、壺片、丸瓦片、平瓦片が多量に出土している。



遺構名	層位	土色	土性	備考
SK18	1a	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	礫を少量含む　歯車文軒丸瓦を出土　D-D′
	1b	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	
	2	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	やや大きめの礫を含む
SK19	1	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	炭化物多量に含む　E－E′
	2	10YR5/8 黄褐色	シルト質粘土	礫を多量に含む
SD21	1	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	瓦を含む　F－F′・G-G′
	2	10YR3/4 暗褐色	シルト質粘土	
SD22	1	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	H－H′
	2	10YR3/4 暗褐色	シルト質粘土	
SD21･22	1	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	I－I′
SD24	1	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	小礫を多量に含む　I－I′
	2	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	中礫を多量に含む
SD26	1	10YR4/1 褐灰色	粘土質シルト	酸化鉄を多量に含む　J－J′
	2	10YR4/1 褐灰色	粘土	

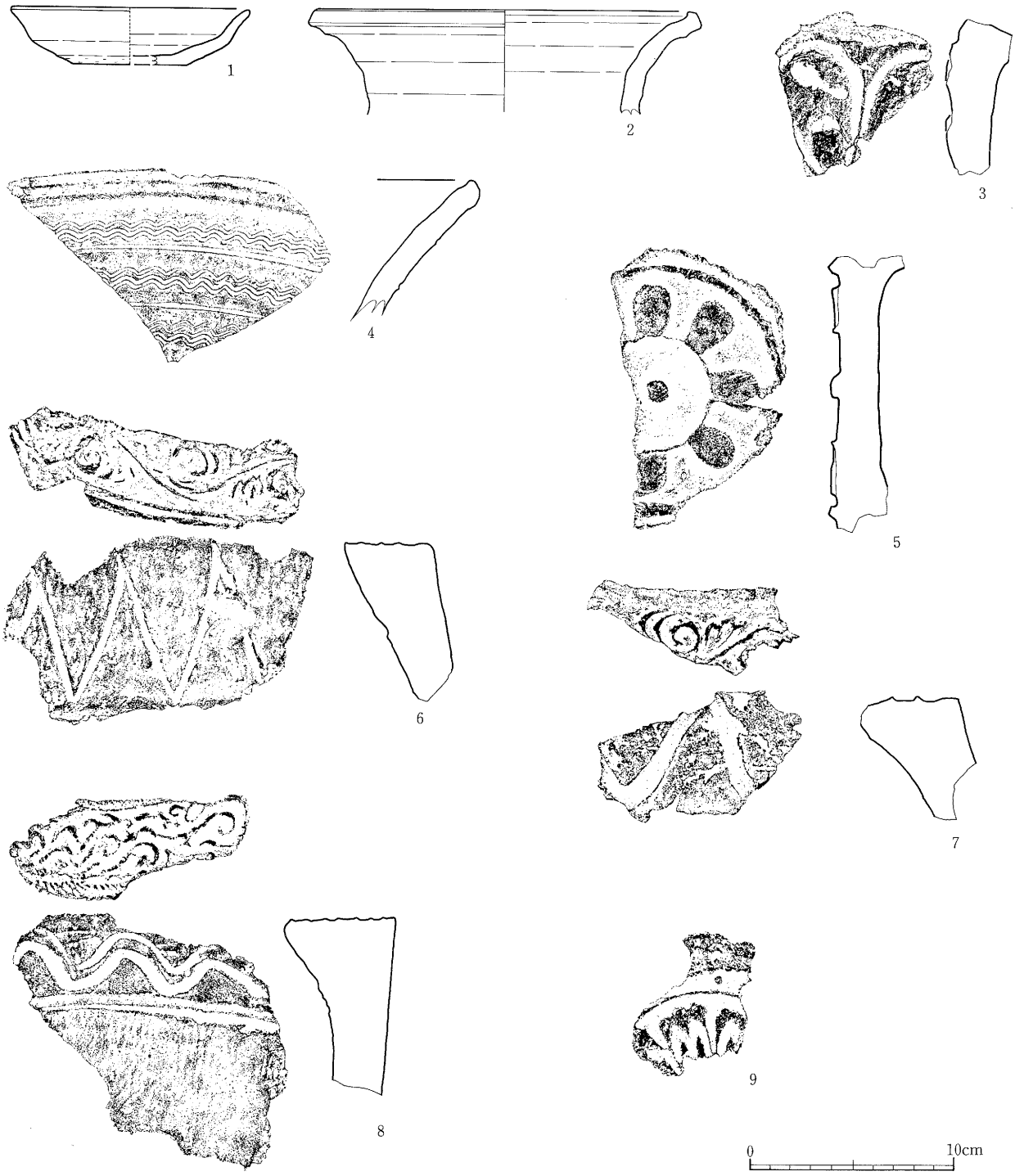
遺構名	層位	土色	土性	備考
基本層位	Ⅰa	2.5Y8/6 黄色	砂	盛土　Ⅰ区南壁
	Ⅰb	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	旧耕作土・小礫を含む
	Ⅰc	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	
	Ⅰd	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土	
SD27	1	10YR4/4 褐色	シルト質粘土	Ⅰ区南壁
	2	10YR4/4 褐色	シルト質粘土	礫をブロック状に含む
SD28	1	10YR5/4 にぶい黄褐色	シルト質粘土	Ⅰ区南壁
	2	10YR5/4 にぶい黄褐色	シルト質粘土	礫をブロック状に含む
SD30	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	Ⅰ区南壁
	2	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	礫を多量に含む
SD27	1	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	K－K′
	2	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	礫を多量に含む
	3	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土	
SD28	1	10YR5/4 にぶい黄褐色	粘土質シルト	砂質の土を少量含む　K－K′
SD29	1	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	砂粒を少量含む　L－L′
SD25	1	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	炭化物を少量含む　N－N′
SD32B	1a	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	小礫を含む　O－O′
	2	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	小礫を含む　黄褐色粘土を少量含む
SD32A	1a	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	小礫を含む　P－P′
	1b	10YR3/3 暗褐色	シルト質粘土	小礫を含む
	Pit12	10YR4/4 褐色	粘土	黄褐色粘土を少量含む

第11図　第10次調査断面図（土坑・溝跡）



図版番号	登録番号	種別 器形	出土地点 地区	出土地点 遺構	出土地点 層位	特徴	備考	写真図版
1	F－29	軒丸瓦	I区	SD－26	1層	細弁蓮華文　凸面ケズリ、凹面ナデ		12－2
2	F－31	軒丸瓦	I区	SD－26	1層	歯車文　凹面縄叩き→ナデ		13－8
3	F－30	軒丸瓦	II B区	カクラン		歯車文		12－9
4	G－54	軒平瓦	I区	SD－26	1層	均整唐草文		12－3
5	G－55	軒平瓦	I区	SD－26	1層	均整唐草文		12－4
6	G－60	平瓦	II B区	遺構検出面		凸面格子叩き、凹面布目痕		

第12図　第10次調査出土遺物（1）



図版番号	登録番号	種別 器形	出土地点 地区	遺構	層位	特徴	備考	写真図版
1	E－21	須恵器・坏	II B 区	遺構検出面		器高 2.8 cm 口径(11.8 cm) 底径(5.6 cm)	内面に油煙状の付着物あり	13－10
2	E－22	須恵器・甕	II B 区	SA7W6 抜き取り		口径 19.2 cm		11－3
3	F－27	軒丸瓦	I 区	SK－19	1 層	重弁蓮華文		13－2
4	E－23	須恵器・甕	I 区	SD－22	1 層	波状沈線		
5	F－25	軒丸瓦	I 区	SK－17		歯車文		12－10
6	G－53	軒平瓦	I 区	SD－31		均整唐草文		12－8
7	G－46	軒平瓦	I 区	遺構検出面		均整唐草文		13－9
8	G－59	軒平瓦	I 区	SK20	1 層	均整唐草文		13－3
9	F－23	軒丸瓦	I 区	遺構検出面		細弁蓮華文		13－7

第13図　第10次調査出土遺物（２）

○ⅡA区

ＳＡ９柱列　調査区のほぼ中央を東西方向に延びる柱列である。総長は6.2m 以上、柱間寸法は292～323cm、方向はＥ－0°－Ｎである。柱穴は、掘り方が一辺47～69cm×38～43cm の隅丸方形で、柱痕跡は直径21～28cm の円形もしくは楕円形である。

［出土遺物］　遺物は出土しなかった。

ＳＸ３　調査区の西壁沿いに溝状に一部を検出したのみで、遺構が調査区外へ延びるために全体の形状や規模は不明である。検出長は6.33m、上幅は46cm 以上、深さは13～37cm である。壁は緩やかに立ち上がる。堆積土は、暗褐色シルト及び粘土質シルト、黒褐色粘土質シルトである。

［出土遺物］　堆積土中より、土師器坏片、甕片、須恵器坏片、縄文土器片、丸瓦片、石器が出土している。

○ⅡB区

ＳＡ６柱列　東西方向に延びる柱列である。総長23.6m 以上、柱間寸法は312～403cm、方向はＥ－3°－Ｎである。柱穴は、掘り方が一辺86～103cm×85～89cm の隅丸方形で、柱痕跡は直径22～30cm の円形である。柱穴の深さは遺構検出面より50cm ほどである。掘り方の埋め土は、褐色シルト質粘土、暗褐色粘土質シルト及び粘土、にぶい黄褐色シルト及びシルト質粘土、黒褐色粘土質シルトである。Ｗ８柱穴に抜き取り穴を伴っている。

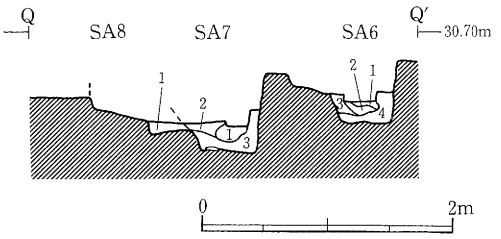
ＳＸ２を切り、ＳＡ７柱列に切られている。

［出土遺物］　Ｗ５柱穴掘り方埋め土よりフイゴ羽口 P-1（図版13－11）が出土した他、各柱穴掘り方埋め土より土師器坏片、丸瓦片、平瓦片が少量出土した。

ＳＡ７柱列　東西方向に延びる柱列である。総長23.6m 以上、柱間寸法は311～389cm、方向はＥ－3°－Ｎである。柱穴は、掘り方が一辺55～87cm×66～98cm の隅丸方形で、柱痕跡は直径16～41cm の円形である。柱穴の深さは遺構検出面より60cm ほどである。掘り方の埋め土は、褐色粘土質シルト及び粘土、暗褐色シルト質粘土である。W6 柱穴に抜き取り穴を伴っている。

ＳＡ６、ＳＡ８柱列、ＳＸ２を切っている。

［出土遺物］　W6 柱穴の抜き取り穴より須恵器甕片Ｅ－22（第13図２）が出土した他、土師器坏片、甕片、赤焼き土器坏片、須恵器坏片、丸瓦片、平瓦片、縄文土器片、鉄滓が出土した。



SA6W6・SA7W6・SA8W2 セクション

層位	土色	土性	備考
SA8W2			
1	10 YR3/4　暗褐色	粘土質シルト	柱痕跡
SA7W6			
1	10 YR3/4　暗褐色	シルト質粘土	柱痕跡
2	10 YR4/4　褐色	粘土質シルト	黄褐色土・小礫を含む
3	10 YR4/4　褐色	粘土	礫・瓦片・炭化物を含む
SA6W6			
1	10 YR4/4　褐色	シルト質粘土	柱痕跡
2	10 YR4/3　にぶい黄褐色	シルト質粘土	柱痕跡
3	10 YR4/3　にぶい黄褐色	粘土質シルト	小礫を少量含む
4	10 YR3/3　暗褐色	粘土	

第 14 図　SA６・７・８柱列断面図

ＳＡ８柱列　東西方向に延びる柱列である。総長 l0.2m 以上、柱間寸法は309～377cm、方向はＥ－1°－Ｓである。柱穴は、掘り方が一辺86～91cm×85～94cm の隅丸方形で、柱痕跡は直径16～27cm の円形である。柱穴の深さは遺構検出面より20cm ほどである。掘り方の埋め土は、暗褐色粘土質シルトである。

ＳＸ２を切り、ＳＡ７柱列に切られている。

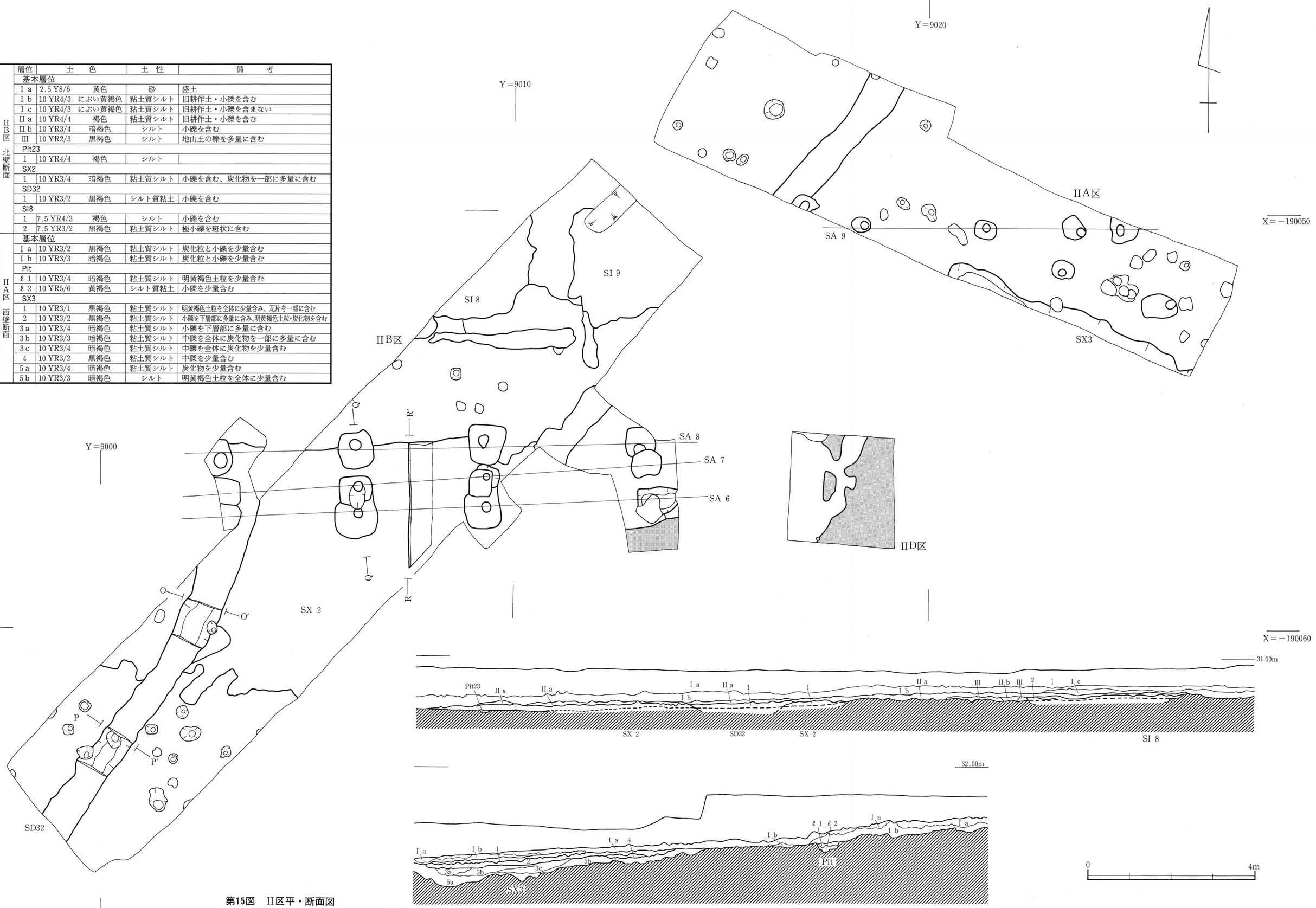
［出土遺物］　Ｗ１柱穴掘り方埋め土より丸瓦片、平瓦片が少量出土したのみである。

ＳＸ２　調査区のほぼ中央から南半にかけて検出した。平面形は、遺構が調査区外へ延びるために明確ではないが，東西7.74m 以上、南北5.78～6.37m、深さ11～19cm の方形プランを持つと思われる。方向は、北壁沿いでＥ－1°－Ｎである。断面形は扁平な逆台形を呈し、底面は平坦で壁は直立気味に立ち上がる。堆積土は、褐色粘土質シルト、暗褐色粘土質シルト、暗褐色粘土質シルトである。

ＳＡ６、ＳＡ７、ＳＡ８柱列、ＳＤ32溝跡に切られている。

［出土遺物］　堆積土中より平瓦片が２点出土した。

	層位	土色		土性	備考
IIB区北壁断面	基本層位				
	Ⅰa	2.5 Y8/6	黄色	砂	盛土
	Ⅰb	10 YR4/3	にぶい黄褐色	粘土質シルト	旧耕作土・小礫を含む
	Ⅰc	10 YR4/3	にぶい黄褐色	粘土質シルト	旧耕作土・小礫を含まない
	Ⅱa	10 YR4/4	褐色	粘土質シルト	旧耕作土・小礫を含む
	Ⅱb	10 YR3/4	暗褐色	シルト	小礫を含む
	Ⅲ	10 YR2/3	黒褐色	シルト	地山土の礫を多量に含む
	Pit23				
	1	10 YR4/4	褐色	シルト	
	SX2				
	1	10 YR3/4	暗褐色	粘土質シルト	小礫を含む、炭化物を一部に多量に含む
	SD32				
	1	10 YR3/2	黒褐色	シルト質粘土	小礫を含む
	SI8				
	1	7.5 YR4/3	褐色	シルト	小礫を含む
	2	7.5 YR3/2	黒褐色	粘土質シルト	極小礫を斑状に含む
IIA区西壁断面	基本層位				
	Ⅰa	10 YR3/2	黒褐色	粘土質シルト	炭化粒と小礫を少量含む
	Ⅰb	10 YR3/3	暗褐色	粘土質シルト	炭化粒と小礫を少量含む
	Pit				
	ℓ1	10 YR3/4	暗褐色	粘土質シルト	明黄褐色土粒を少量含む
	ℓ2	10 YR5/6	黄褐色	シルト質粘土	小礫を少量含む
	SX3				
	1	10 YR3/1	黒褐色	粘土質シルト	明黄褐色土粒を全体に少量含み、瓦片を一部に含む
	2	10 YR3/2	黒褐色	粘土質シルト	小礫を下層部に多量に含み、明黄褐色土粒・炭化物を含む
	3a	10 YR3/4	暗褐色	粘土質シルト	小礫を下層部に多量に含む
	3b	10 YR3/3	暗褐色	粘土質シルト	中礫を全体に炭化物を一部に多量に含む
	3c	10 YR3/4	暗褐色	粘土質シルト	中礫を全体に炭化物を少量含む
	4	10 YR3/2	黒褐色	粘土質シルト	中礫を少量含む
	5a	10 YR3/4	暗褐色	粘土質シルト	炭化物を少量含む
	5b	10 YR3/3	暗褐色	シルト	明黄褐色土粒を全体に少量含む



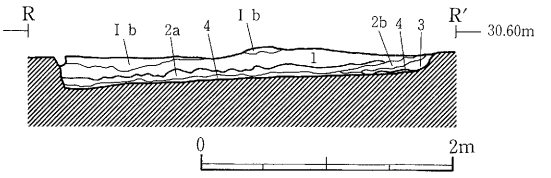
第15図　II区平・断面図

ＳＤ32溝跡　調査区の中央北壁沿いより西半にかけて検出した。総長9.2m以上で南北方向に延びる溝跡である。上幅58～97cm、下幅29～48cm、深さ18～25cmで、壁は緩やかに立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。底面はほぼ平坦である。方向は、Ｎ－23°－Ｅで、堆積土は褐色粘土質シルト、暗褐色シルト質粘土、黒褐色シルト質粘土である。

ＳＸ２を切っている。

［出土遺物］　堆積土中より土師器坏片、甕片、須恵器壺片、丸瓦片、平瓦片、鉄滓が出土した。

ＳＩ８、９竪穴遺構は検出したにとどめている。



SX2 南北壁セクション

層位	土　色	土　性	備　考
Ⅰb	10 YR4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	旧耕作土
1	10 YR3/4　暗褐色	粘土質シルト	小礫、酸化鉄を含む
2a	10 YR4/4　褐色	粘土質シルト	中礫を多量に含む
2b	7.5 YR2/2　黒褐色	粘土質シルト	炭化物、焼土塊をブロック状に含む
3	10 YR3/3　暗褐色	粘土質シルト	小礫を微量に含む
4	10 YR3/3　暗褐色	粘土質シルト	

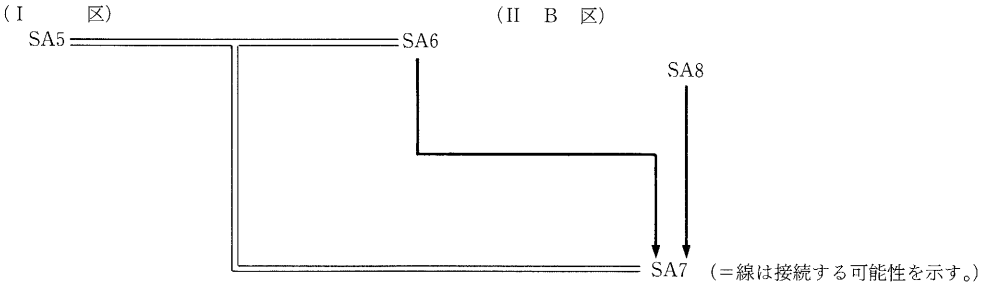
第16図　SX 2断面図

３．まとめ

今回の第10次調査で発見された遺構は、柱列５列、溝跡10条、竪穴遺構５基、土坑６基、性格不明遺構３基、小柱穴、ピットなどである。ここでは以下の項目について若干の考察を加え、まとめとしたい。

○ＳＡ５・６・７・８柱列について

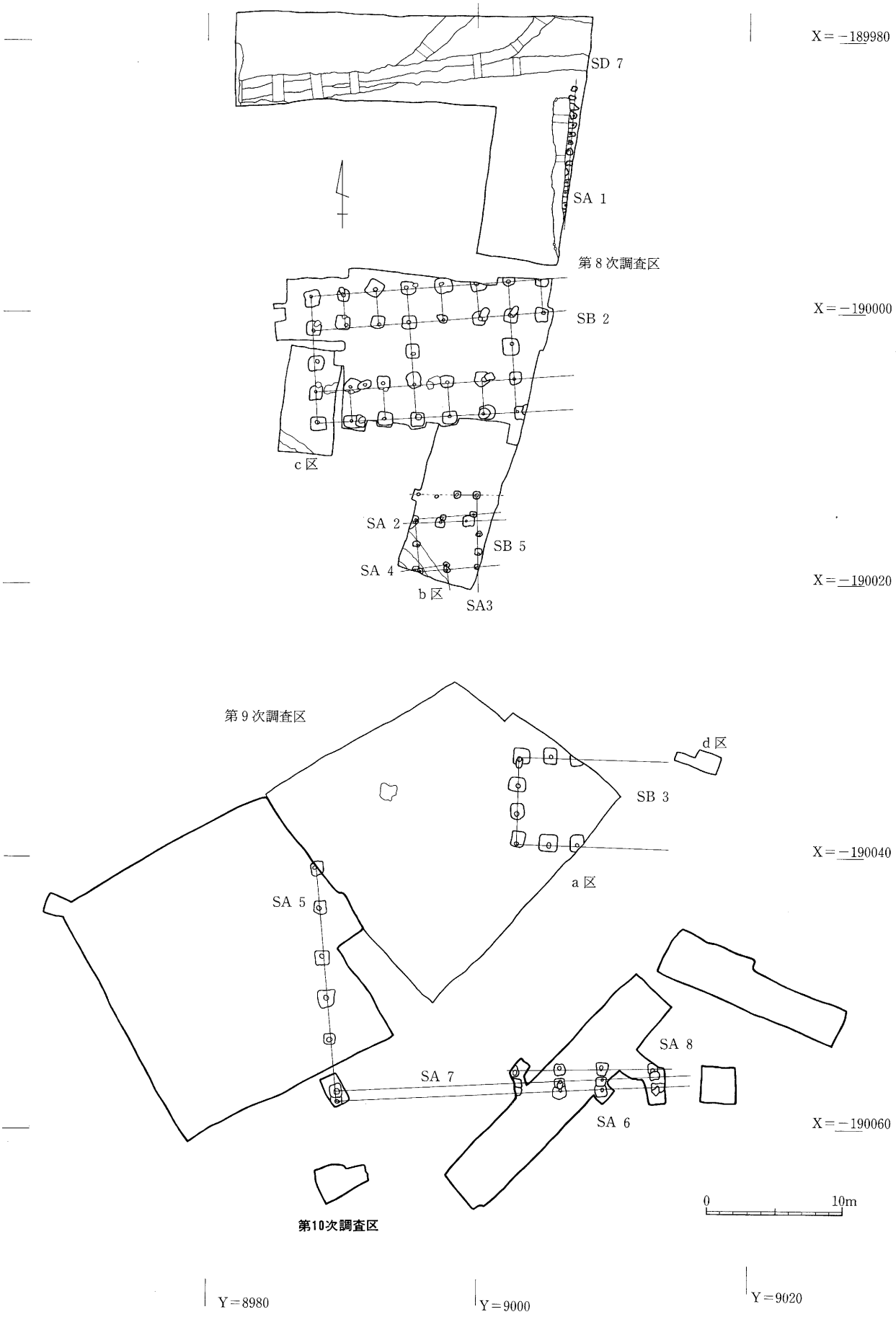
今回の第10次調査では、昨年の第９次調査で発見したＳＢ３掘立柱建物跡を取り囲むような形で西側に１列、南側に３列の柱列を検出した。各柱列の重複関係は以下の通りである。（並列関係は必ずしも遺構の同時性を示すものではない。）



Ⅰ区ではＳＡ５柱列の南端と推定される柱穴のみ重複が認められる。ⅡＢ区ではＳＡ７柱列がＳＡ６柱列とＳＡ８柱列を切っており柱列の配置からＳＡ５柱列南端の柱穴の重複は、ＳＡ６・ＳＡ７柱列の重複に対応するものと推定される。一方ＳＡ８柱列はＳＡ５柱列の南端部分までは延びていないと考えられ、またＳＡ６・ＳＡ７柱列に比べ東西の柱筋にばらつきがある。

次に出土した遺物については、ＳＡ６・ＳＡ８柱列の柱穴より凸面縄叩きで、凹面にきわめて粗い布目痕の付いた平瓦片が出土している。これは陸奥国府である多賀城跡のⅣ期の年代が与えられているものであり、貞観11年（869）以降の９世紀後半代のものである。またＳＡ５柱列の柱穴からは赤焼き土器片が出土していることから、９世紀末以降の年代が考えられる。しかし各柱列とも残存状態が良好でなく、遺構の一部を検出したにすぎないことから、各柱列の年代は９世紀後半から10世紀代とみておきたい。

さらに、これまでの調査で検出した主要な遺構の方向は、ＳＢ３掘立柱建物跡（Ｎ－１°－Ｅ）を中心とした真北方向基準の遺構群とＳＢ２掘立柱建物跡「僧房」（Ｎ－４°－Ｗ）を中心とした真北よりやや西に偏する遺構群とに大別できる。昨年度の調査では、ＳＢ３掘立柱建物跡がＳＢ２掘立柱建物跡「僧房」より先行する可能性を指摘した。したがってそれらの建物と同方向である今回検出した各柱列が同じような変遷をしている可能性もある。このことについては、今後とも出土遺物の年代も踏まえてさらに検討していきたい。



第17図　燕沢遺跡遺構配置図

写　真　図　版

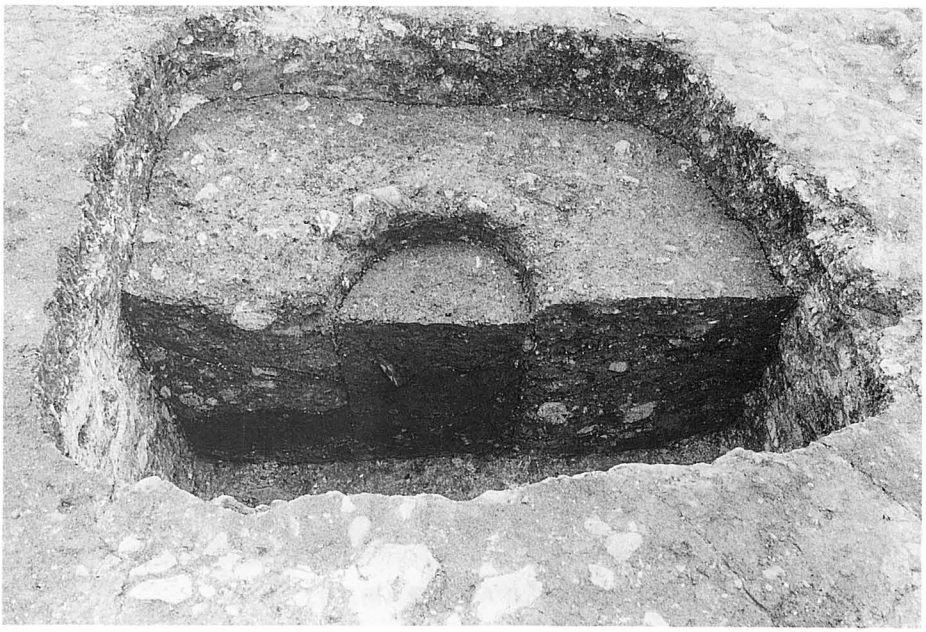
図版１　Ｉ区全景（東より）

図版２　ＩＩＡ区全景（南より）

図版３　ＩＩＢ区全景（西より）

図版 4　SA5 柱列全景（南より）

図版 5　SA6・7W1 柱穴（南より）

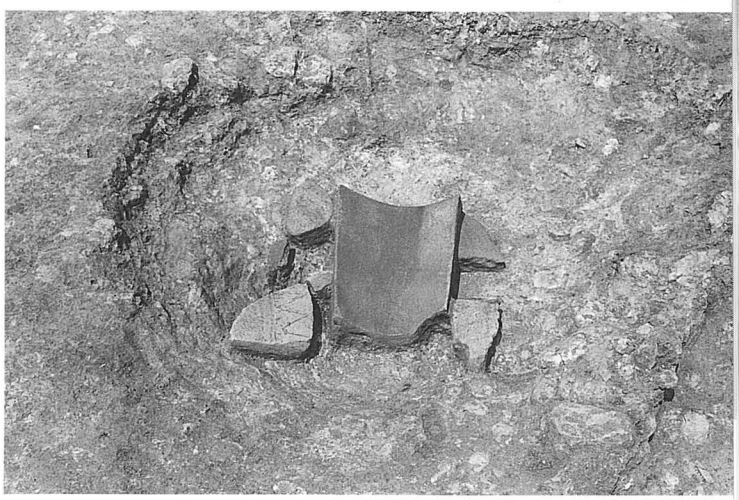


図版 6　SA5 柱列 N4 柱穴土層断面（西より）

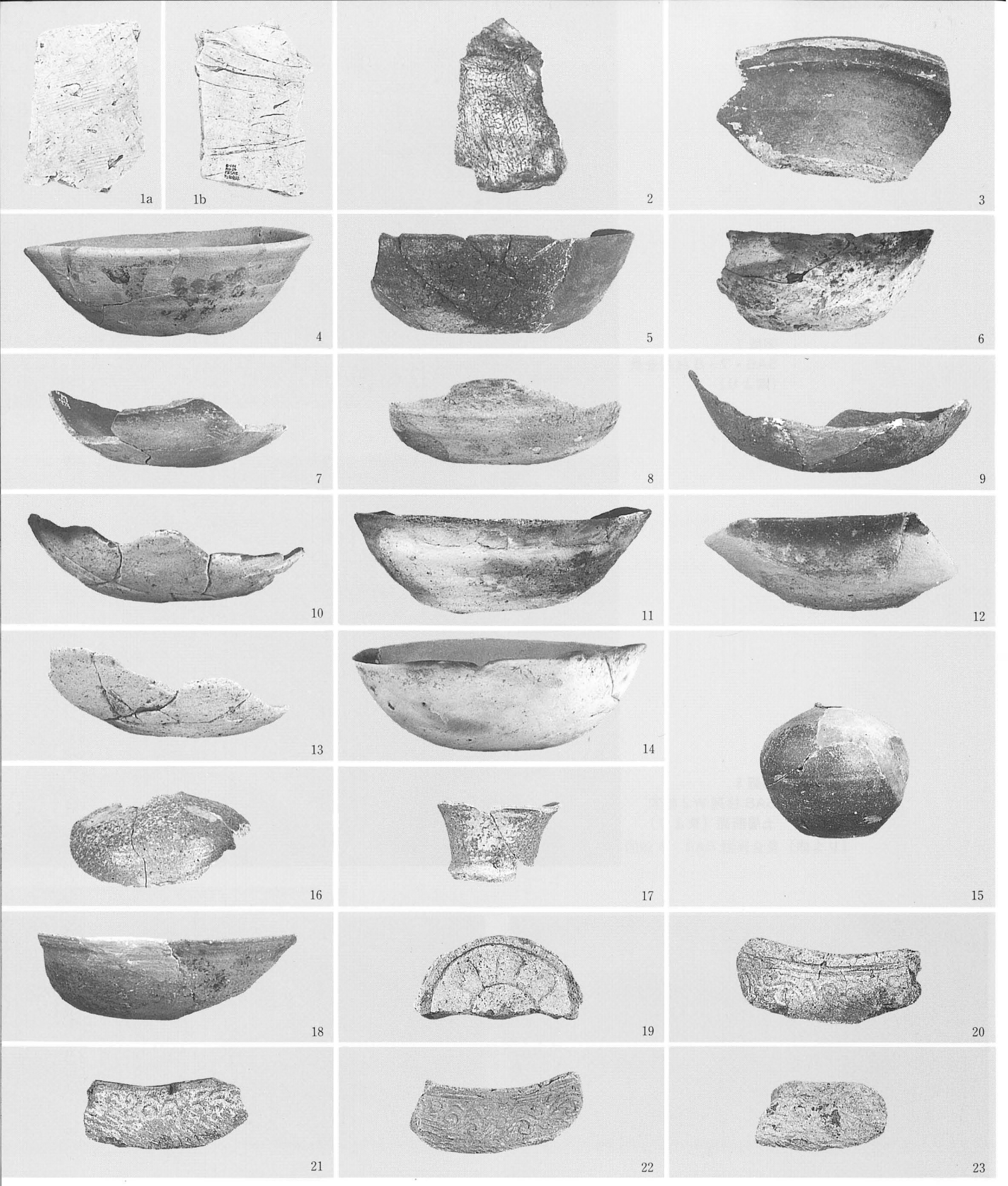
図版 7
SA6・7・8 柱列全景
（南より）

図版 8
SA8 柱列 W2 柱穴
土層断面（東より）

図版 9　SA5 柱列・SK17 土坑・SD21 溝跡全景

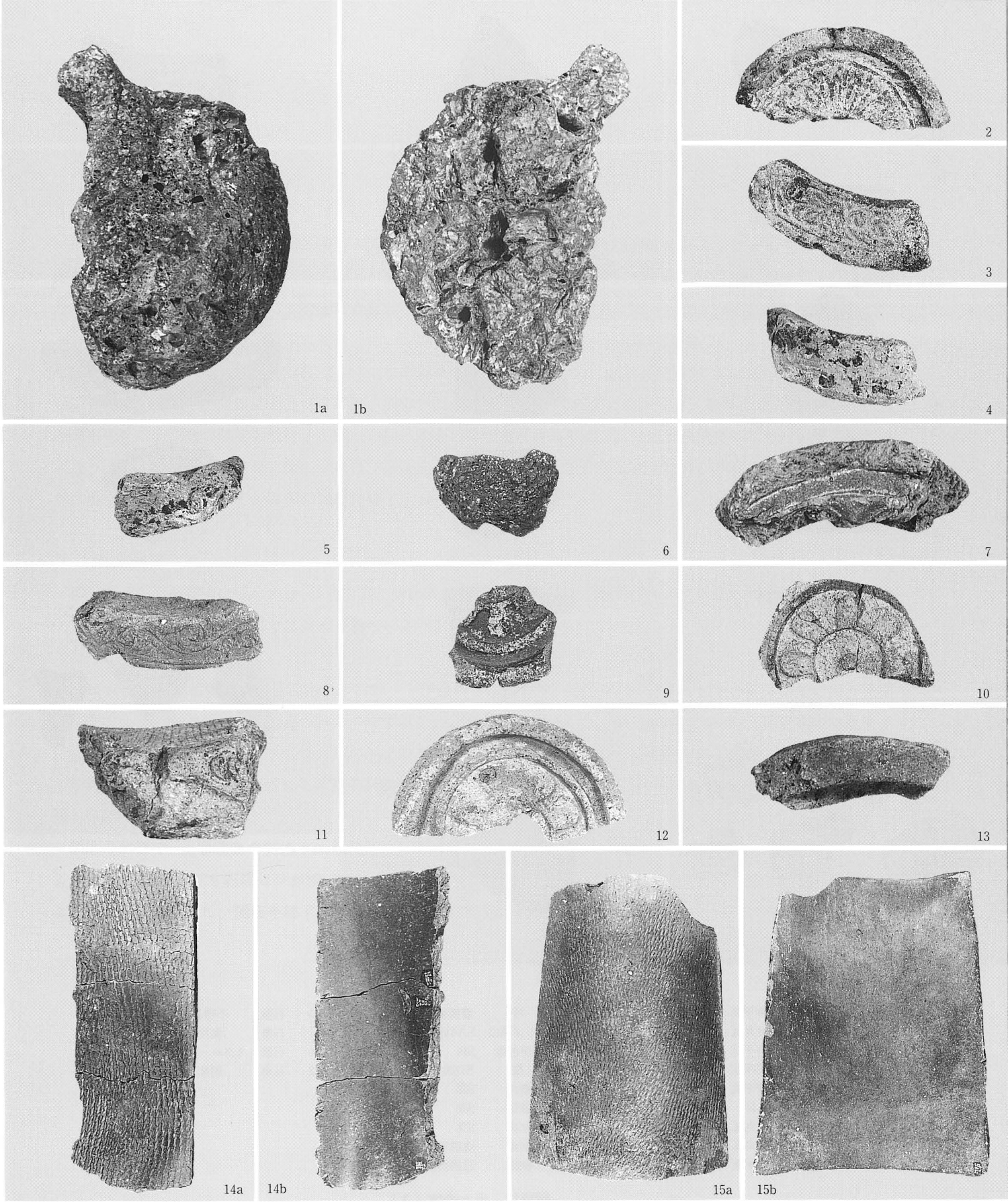


図版10　SK18 土坑遺物出土状況（G-50・62）



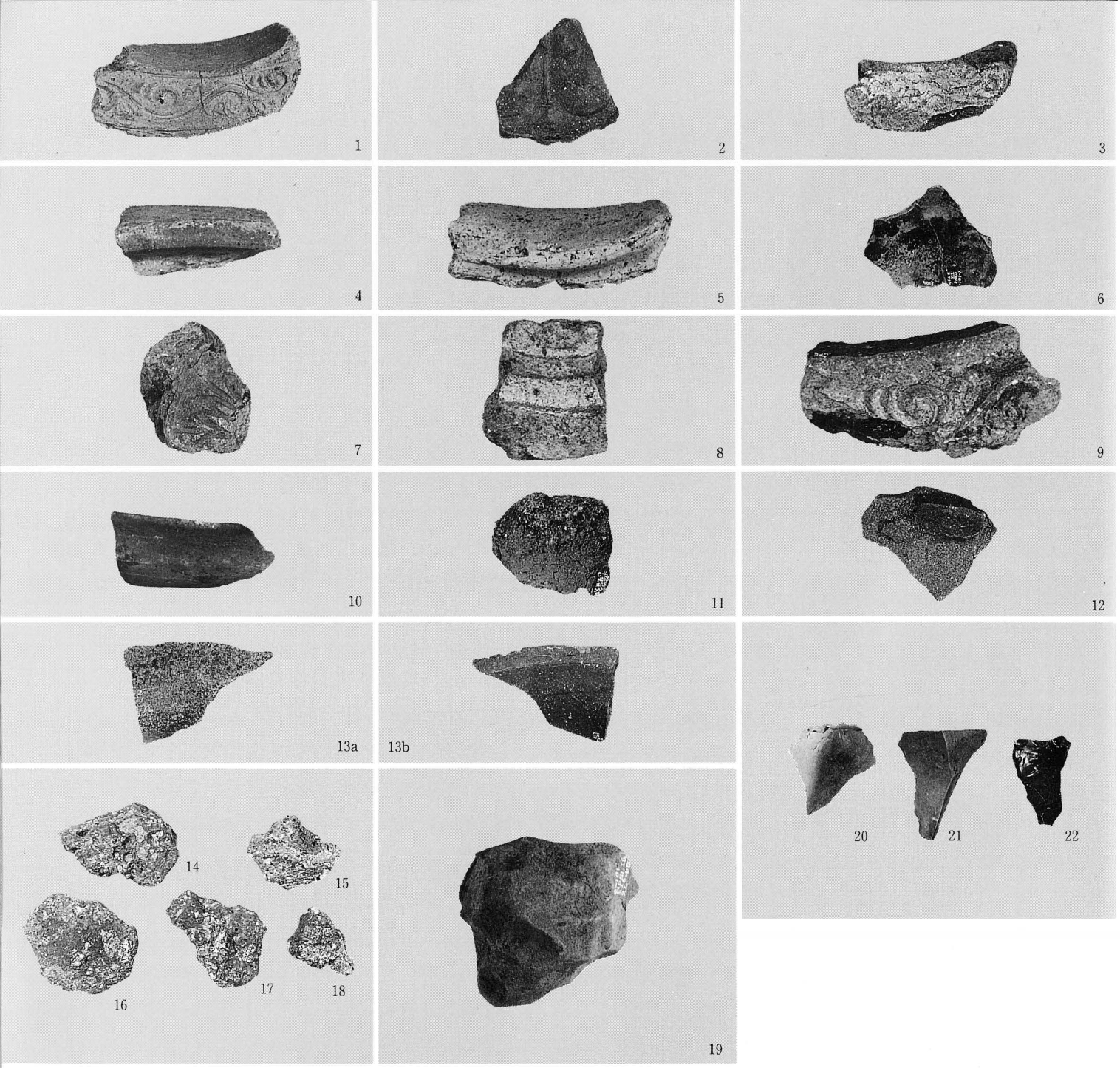
1．G-52　熨斗瓦　SA5N3　柱痕跡
2．P-2　不明土製品　SA5N4　掘り方
3．E-22　甕　SA7W6　抜き取り穴
4．D-67　坏　SI6
5．D-68　坏　SI6
6．D-69　坏　SI6
7．D-70　坏　SI6
8．D-71　坏　SI6
9．D-72　坏　SI6
10．D-73　坏　SI6
11．D-74　坏　SI6
12．D-75　坏　SI6
13．D-76　坏　SI6
14．D-77　坏　SI6
15．E-15　壺　SI6
16．E-16　壺　SI6
17．E-17　広口壺　SI6
18．E-20　坏　SI6
19．F-24　軒丸瓦　SI6
20．G-47　軒平瓦　SI6
21．G-51　軒平瓦　SI6
22．G-61　軒平瓦　SI6
23．G-63　軒平瓦　SI6

図版11　出土遺物（1）



1．N-7　鉄滓　SI6
2．F-29　軒丸瓦　SD26
3．G-54　軒平瓦　SD26
4．G-55　軒平瓦　SD26
5．G-56　軒平瓦　SD26
6．N-3　鉄滓　SI6
7．F-28　軒丸瓦　SD31
8．G-53　軒平瓦　SD31
9．F-30　軒丸瓦　攪乱
10．F-25　軒丸瓦　SK17
11．G-48　軒平瓦　SK17
12．F-26　軒丸瓦　SK18
13．F-32　軒丸瓦　SK18
14．G-49　平瓦　SK18
15．G-62　平瓦　SK18

図版12　出土遺物（2）



1. G-50	軒平瓦	SK18	10. E-21	坏	遺構検出面	19. K-23	石器	不明品	SI6
2. F-27	軒丸瓦	SK19	11. P-1	フイゴ羽口	SA6W5 掘り方	20. K-21	石器	剝片	SD26
3. G-59	軒平瓦	SK20	12. E-24	把手付壺	SI6	21. K-20	石器	スクレーパー	SI6
4. G-57	軒平瓦	表土	13. E-18	甕	SD26	22. K-22	石器	剝片	遺構検出面
5. G-58	軒平瓦	表土	14. N-4	鉄滓	SI6				
6. E-19	坏	攪乱	15. N-5	鉄滓	SI6				
7. F-23	軒丸瓦	遺構検出面	16. N-6	鉄滓	SI6				
8. F-31	軒丸瓦	SD26	17. N-8	鉄滓	遺構検出面				
9. G-46	軒平瓦	遺構検出面	18. N-9	鉄滓	遺構検出面				

図版13　出土遺物（3）

［2］ 郡山遺跡

1．位置と環境

郡山遺跡は、仙台市太白区郡山二丁目～六丁目に位置し、東西800m、南北900mの60万㎡に及ぶ遺跡である。遺跡の北から東にかけて広瀬川、南を名取川が流れ、西北は長町の市街地を介して標高100～200mの青葉山丘陵が迫り、西南は平野部が続いている。発掘調査は昭和55年から継続的に進められ、以下のことが明らかになってきている。すなわち、新しい時期（II期官衙）と古い時期（I期官衙）の2時期の官衙が同地にあったこと。I期官衙は造営基準方向が真北から30～40°ふれており、材木列や溝跡により区画され内部には官舎や倉が集中していたこと。II期官衙は造営基準方向が真北方向を取り、四町（428m）四方の範囲で外郭に材木列と大溝をめぐらしていたこと。内部中央には四面廂付建物の他に、石敷や石組池などの稀な遺構があること。II期官衙南方には同一基準方向の寺が建っていたこと。寺とII期官衙の間には、四面廂付建物をはじめ大型の掘立柱建物群が存在すること。7世紀後半代から8世紀初めまでで、官衙の機能が終了することなどである。

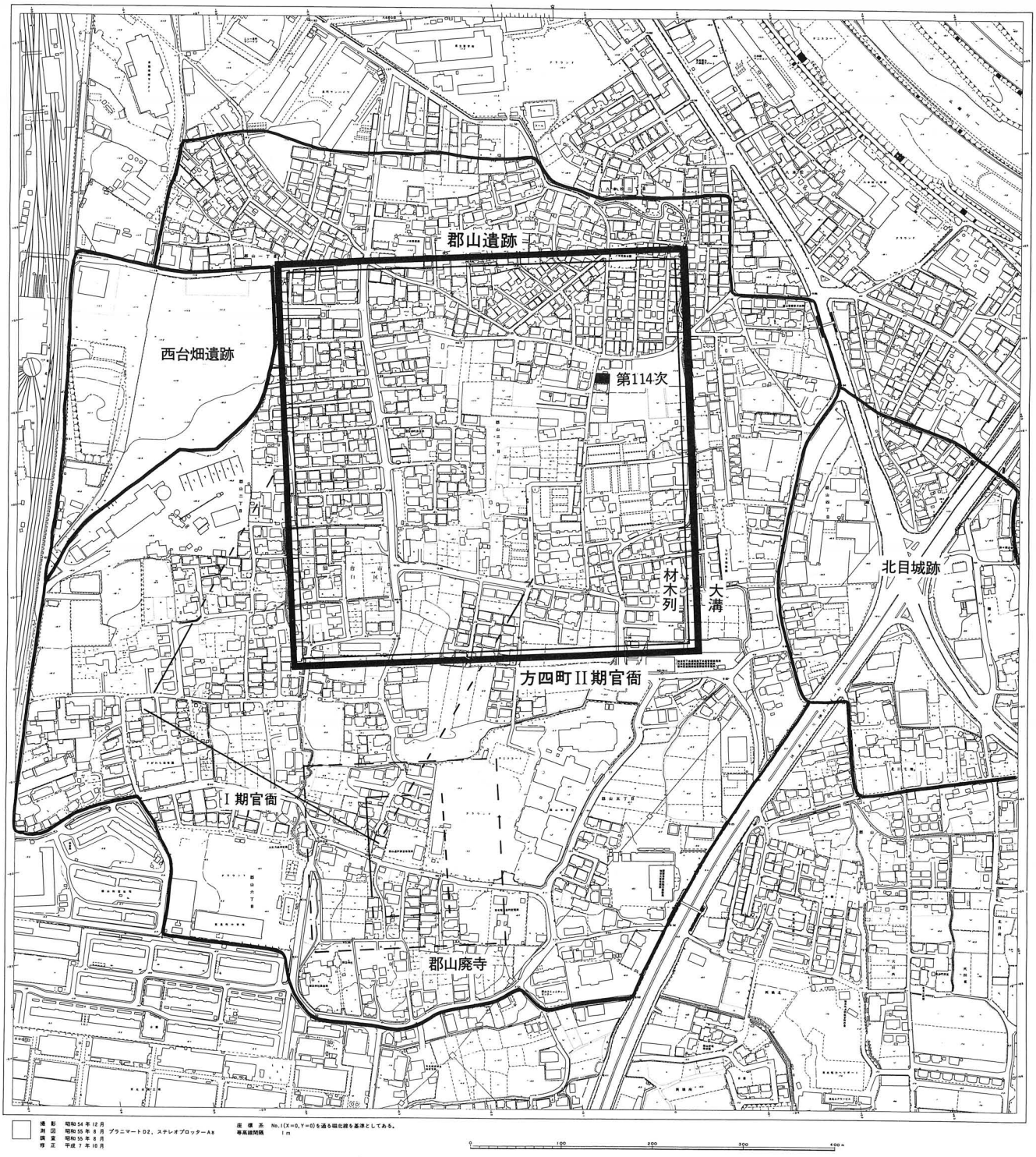
2．調査概要

郡山遺跡の発掘調査については、仙台市文化財調査報告書第215集「郡山遺跡XVII――平成8年度発掘調査概報――」に詳細に記述し、本報告では概要を載せるにとどめる。

第114次調査

第114次調査は、仙台市太白区郡山3丁目23－8伊藤みさほ氏より、同住所に所在する住宅の解体新築に伴う発掘届が平成8年11月26日付けで提出されたのを受けて、12月9日に実施した。調査地は、方四町II期官衙内の北東部に位置している。当地は、以前に煉瓦用の粘土を採取するための掘削により、旧地形が削平されていると考えられた地点であった。しかし建築される建物の基礎工事に伴って、地表より1.5m下まで土壌改良が実施されるため、遺構の確認調査を行なった。

敷地の北側で、土壌改良の実施される部分の1.5×6 mの範囲に調査区を設定した。表土排除をしたところ、地表より2 m下に至っても石炭ガラが検出され、さらに下層にも続いている状況であった。よって調査区内の写真撮影と土層断面図を作成し、調査を終了した。遺構、遺物は発見されなかった。



第18図　郡山遺跡位置図

［3］ 成　館　跡

1．調査に至る経過

本沢上土地改良事業は平成6年度から実施された農地総合改良事業である。平成7年9月に本沢上土地改良事業共同施行委員長・奥山倉吉から埋蔵文化財の発掘届が提出され、成館跡の水濠部分を埋め、さらに一部道路・河川・水路を建設する計画であったことから、事前の発掘調査を実施することとした。平成7年度には成館跡全体の地形測量・航空写真撮影を実施し、発掘調査は平成8年11月5日から着手した。

2．調査要項

遺　跡　名　成館跡（宮城県遺跡番号21106）
調 査 地 点　仙台市青葉区芋沢字駒込（旧地名　荒屋敷西）
調 査 原 因　本沢上土地改良事業
調査対象面積　13,000㎡
調 査 面 積　約140㎡
調 査 期 間　平成8年11月5日～11月15日
調 査 主 体　仙台市教育委員会
調 査 担 当　仙台市教育委員会文化財課
担 当 職 員　篠原信彦　竹田幸司
調査参加者　奥山きみ子　川崎としこ　庄子きみよ　庄子きよ子　庄子康子　堀川けい子　梁取洋子
調査協力者　本沢上土地改良事業共同施行　庄子与治

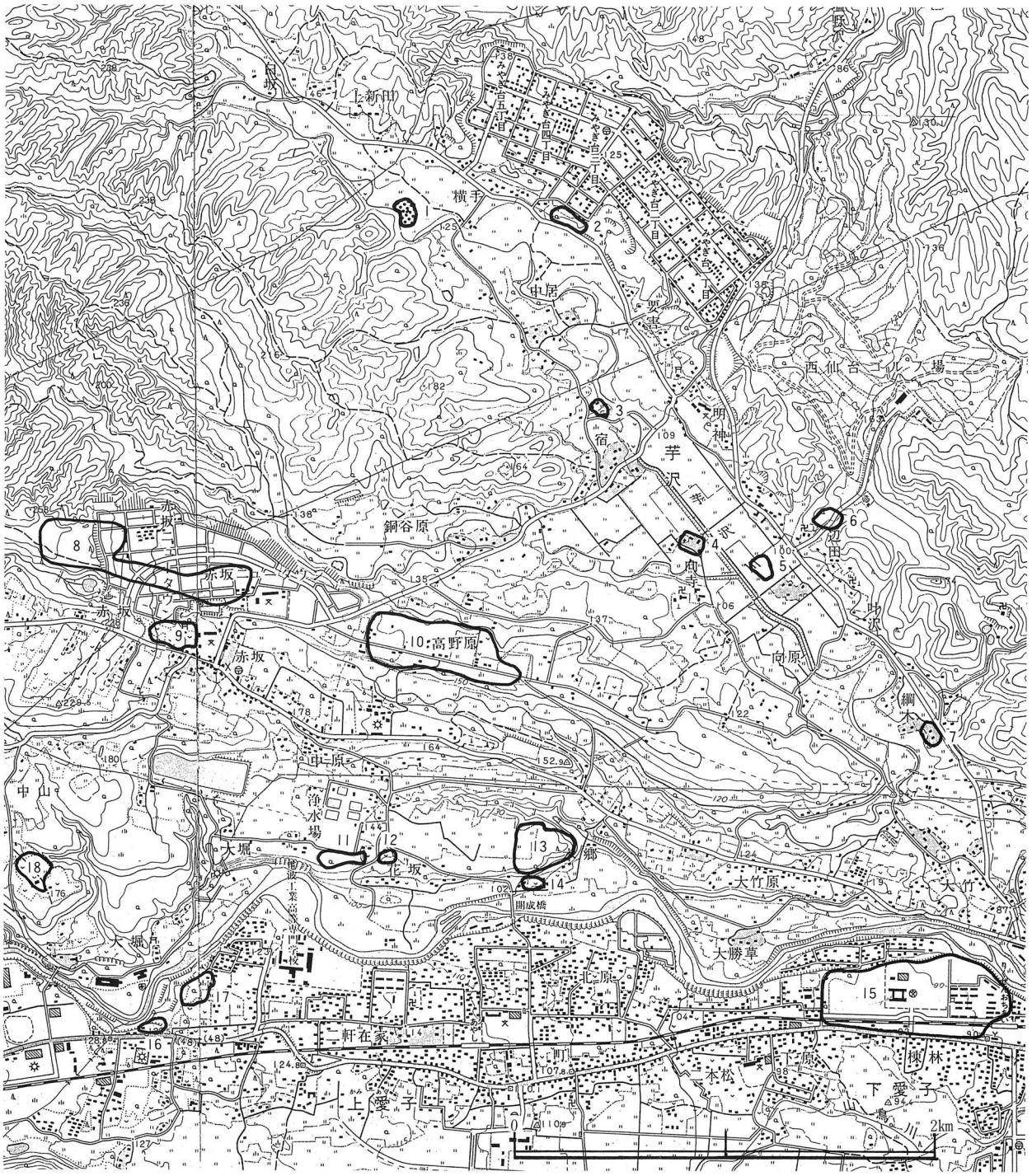
3　遺跡の位置と環境

成館跡はJR愛子駅の北方約4 kmの仙台市青葉区芋沢字駒込に所在し、奥羽山系の船形連峰から派生してくる七北田丘陵・国見丘陵の南側に当たり、広瀬川の一支流である芋沢川によって形成された標高132mの河岸段丘上に立地している。

芋沢川の下流域には中世と考えられる寺下館跡、原館跡、荒神館跡、馬場城跡、江六城跡、芋沢西館跡などの城館跡が位置しており、また南方約2 kmには縄文時代早期末葉から前期初頭の竪穴住居跡13軒などが発見された蒲沢山遺跡のほか、縄文時代の高野原遺跡・赤坂遺跡などが位置している。

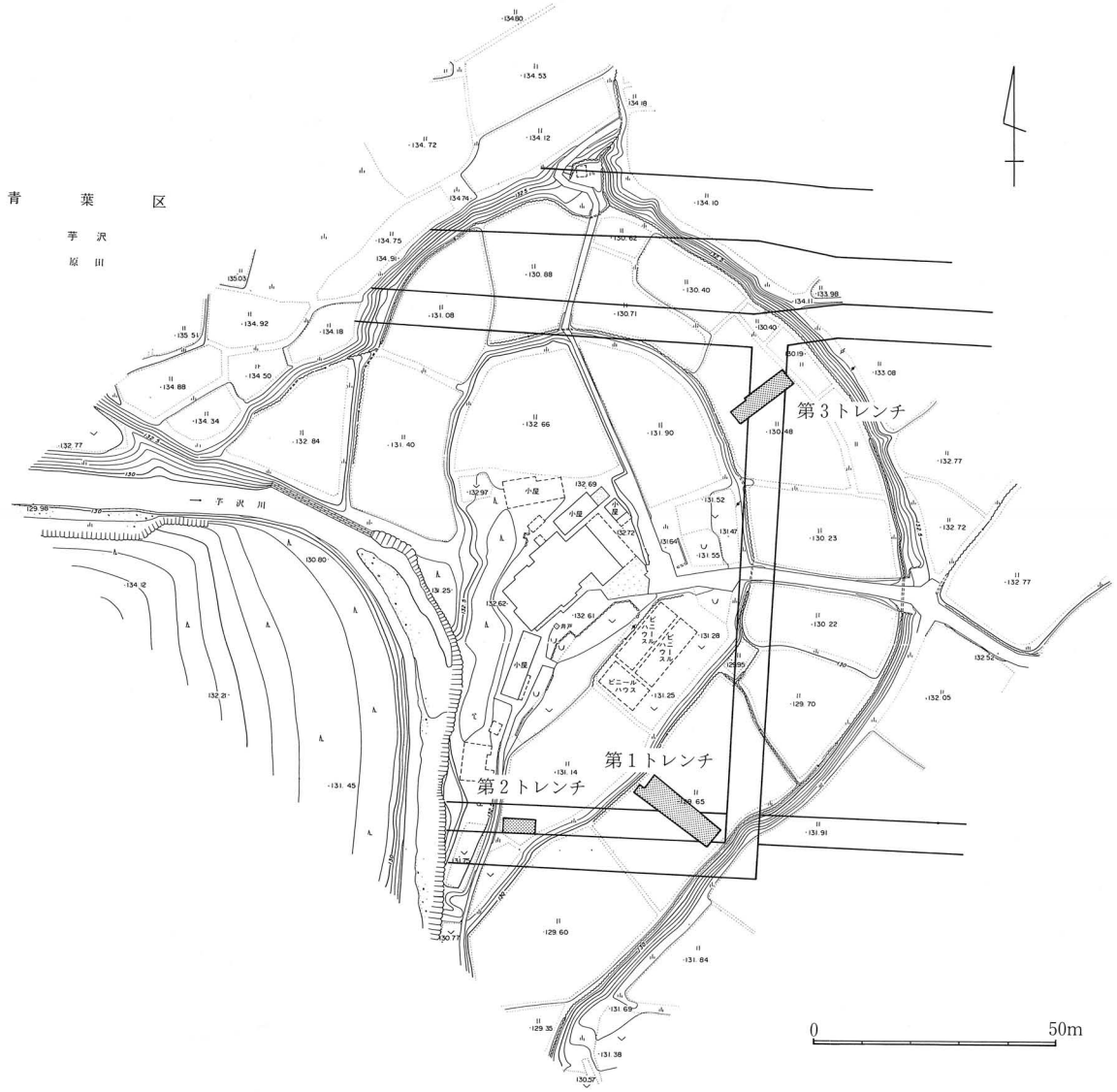
成館跡の記録については、江戸時代の「仙台領古城書上」・「安永風土記書出」には見られず、記録として初見するのは宮城郡誌が最初である。宮城郡誌には、「大沢村にある芋沢の七館址の一つ」として記載され、館主は不詳とある。また「宮城町誌」「仙台領内古城・館」にも同様の記載があり、いずれも城主は不詳あるいは不明とされている。

「仙台領古城・館」によれば、「東西50m、南北100m、芋沢川方面を底辺とし、東側に頂点をおく三角形の地形が館あとである。そのまわり、北、東、南の三面が大体巾15mの大水濠（今は低い水田）により、くまなくとり巻かれるのが一大特徴。・・・西面には高い台地（土塁あと？）を置き、その背後は芋沢川の絶壁に終る。総合的に論ずれば、規模は中型であるが、その防禦陣に一大特徴が見られる要害無類の平城、と高く評価できる。」と記載されている。



No.	遺跡名	立地	時代	No.	遺跡名	立地	時代
1	成館跡	段丘	中世	10	高野原遺跡	段丘	縄文
2	荒神館跡	丘陵	中世	11	中原遺跡	段丘	縄文
3	寺下館跡	段丘	中世	12	花坂遺跡	段丘	縄文（中）
4	原館跡	段丘	中世	13	本郷城跡	段丘	中世
5	馬場城跡	段丘	中世	14	本郷遺跡	段丘	縄文
6	江六城跡	丘陵	中世	15	一本杉遺跡	段丘	縄文（中・後）、平安
7	芋沢西館跡	段丘	中世	16	北原街道遺跡	段丘	縄文
8	蒲沢山遺跡	丘陵	縄文（早・前）	17	北原街道B遺跡	段丘	縄文（前）
9	赤坂遺跡	段丘	縄文	18	下野遺跡	段丘	縄文

第19図　遺跡位置図



第20図　調査区位置図

4．調査の方法

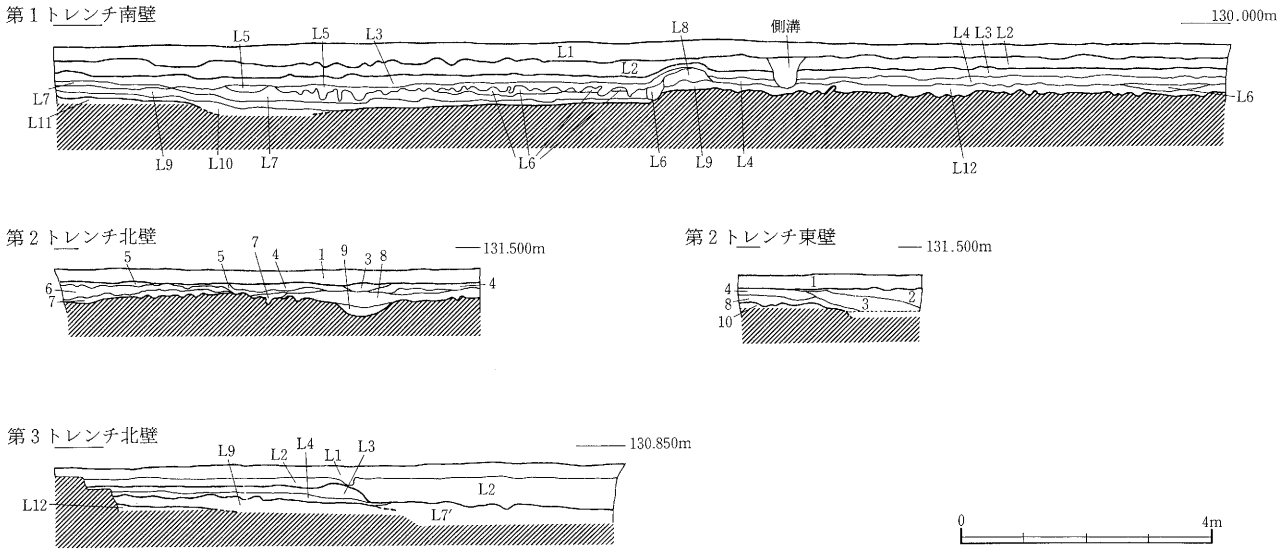
土地改良事業に伴い、埋められる「水濠」部分と河川改修や道路・水路等によって破壊される部分を対象にして調査を実施した。調査区は「水濠」部分に２ケ所、館内部の平坦部分に１ケ所のトレンチを設定して、主に重機により表土等を除去した。

5．調査の概要

成館跡は東西140m、南北160m の範囲であり、南西は芋沢川で画され、その背後には成館山と呼ばれる標高180m の丘陵が続いている。館跡内部は東西50m、南北約100m と南北に長い規模で、周囲は幅20～30m、深さ約1.5から３m の「水濠」が巡り、館跡の中心部には庄子与治氏宅が建っている。

第１トレンチ

水濠に直交するように５×19m のトレンチを設定して実施したが、湧水が著しく調査は難航した。基本層は13層認められた。１層は現在の水田耕作土であり、２層は粗い砂で約20cm と厚く、洪水で一気に堆積したものと考えら



成館跡　註記表

	層位	土色		土性	備考
第１トレンチ　南壁断面					
	L 1	10 YR4/3	にぶい黄褐色	砂質シルト	現在の水田耕作土
	L 2	10 YR6/4	にぶい黄橙色	粗砂	下部細砂にて縞状になっている
	L 3	2.5 YR5/1	黄灰色	シルト質粘土	しまりなし
	L 4	2.5 YR4/1	黄灰色	砂質シルト	未分解の植物遺体、炭化物、パミスを含む
	L 5	2.5 YR5/1	黄灰色	砂質シルト	緑灰色砂を多量に含む
	L 6	10 YR3/3	暗褐色	シルト質粘土	灰白色粘土を斑点状に含む
	L 7	10 YR4/1	褐灰色	シルト質粘土	砂を少量含む
	L 7′	7.5 YR4/3	褐色	スクモ	未分解植物遺体層
	L 8	10 YR4/1	褐灰色	シルト質砂	粗砂と粘土の混合層
	L 9	2.5 YR5/1	黄灰色	シルト質砂	炭化物を含む
	L 10	10 YR4/1	褐灰色	砂質シルト	礫を含む
	L 11	2.5 YR5/1	黄灰色	砂質シルト	礫を含む
	L 12	5 BG6/1	青灰色	粗砂	
第２トレンチ　北壁・東壁断面					
	1	2.5 YR5/1	黄灰色	砂質シルト	現在の水田耕作土
	2	10 YR7/6	明黄褐色	細砂	黄褐色細砂、マンガン粒多量、礫を含む
	3	10 YR4/3	にぶい黄褐色	砂	
	4	10 YR7/6	明黄褐色	細砂	上部に酸化鉄集積層あり
	5	10 YR4/1	褐灰色	シルト	パミス、炭化物を含む
	6	10 YR2/1	黒色	シルト	褐色シルト、にぶい黄橙色粗砂との混合層
	7	10 Y 4/1	灰色	細砂	部分的にグライ化している
	8	10 YR3/3	暗褐色	砂質シルト	炭化物を少量含む
	9	2.5 Y4/1	黄灰色	砂質シルト	黄色シルトを小斑点状に含む
	10	10 YR7/4	にぶい黄橙色	細砂	西側はグライ化している
第３トレンチ　北壁断面					
	L 1	10 YR4/3	にぶい黄褐色	砂質シルト	現在の水田耕作土
	L 2	10 YR6/4	にぶい黄橙色	粗砂	下部細砂にて縞状になっている
	L 3	2.5 Y5/1	黄灰色	シルト質粘土	しまりなし
	L 4	2.5 YR4/1	黄灰色	砂質シルト	未分解の植物遺体、炭化物、パミスを含む
	L 7′	7.5 YR4/3	褐色	スクモ	未分解植物遺体層
	L 9	2.5 Y5/1	黄灰色	シルト質砂	炭化物を含む
	L 12	5 BG6/1	青灰色	粗砂	

第21図　調査区断面図

れる。３～５層は黄灰色シルト質粘土・砂質シルトの水田耕作土である。調査区を横断するように畦畔が認められた。７～９層は未分解の植物遺体層あるいは植物遺体を含む層である。10～12層は褐灰色・青灰色砂質シルト・粗砂で大きな河原石が混じる。13層は砂礫層で湧水が著しい。基本的に層の堆積は水平に堆積している。

第２トレンチ

水路及び道路部分を対象として館跡内部平坦面に３×７ｍのトレンチを設定した。基本層は10層認められた。１層は現在の水田耕作土である。６層は黒色シルトと褐灰色シルト等が斑点状に混じる層であり、８層は黄色シルトを小斑点状に混入する暗褐色砂質シルトである。10層はにぶい黄橙色細砂で、この上面で土坑１基、溝跡１条が検出された。ＳＫ－１土坑は直径1.8m のほぼ円形を呈するもので、断面形はＵ字形で深さ約45cm を測る。堆積土は

3層あり、暗褐色・黄灰色・黒褐色の砂質シルトである。ＳＤ－１溝跡は調査区の西端で検出され、幅50cm、深さ５cmと浅い溝跡で南北方向に走る。土坑・溝跡から遺物が出土していないため時期は不明である。

第３トレンチ

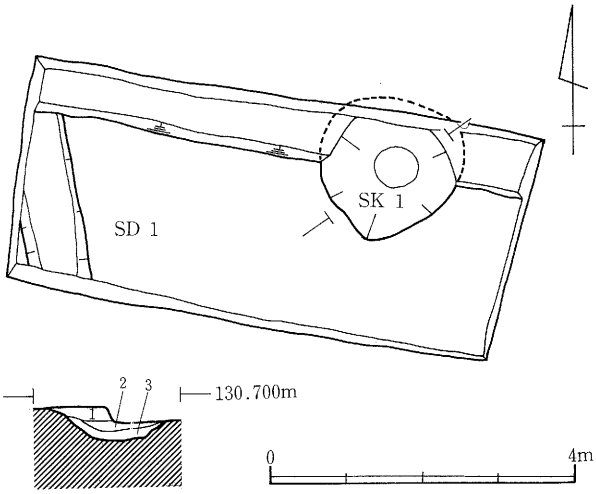
第１トレンチ同様に水濠に直交するように３×７mのトレンチを設定した。このトレンチも第１トレンチと同じ状況であり、基本層についてもほとんど変わりない。

６．まとめ

今回の調査は「水濠」部分と館内部の一部分の調査である。

調査により時期不明の土坑１基・溝跡１条、水濠内では近世から近代と考えられる水田土壌が検出された。

成館跡に伴う遺構は不明であり、「水濠」についても旧河川をそのまま利用したものと考えられるが、あるいは単なる旧河道なのか不明である。成館山にも館跡関連の遺構は見られない。



遺構	層位	土色	土性	備考
SK1	1	10 YR3/3 暗褐色	砂質シルト	炭化物を少量含む
	2	2.5 Y4/1 黄灰色	砂質シルト	黄色シルトを小斑点状に含む
	3	2.5 Y3/1 黒褐色	砂質シルト	しまりなし

第22図　第２トレンチ平面図・SK1断面図

参考文献

宮城郡教育会編纂　1929：「宮城郡誌」

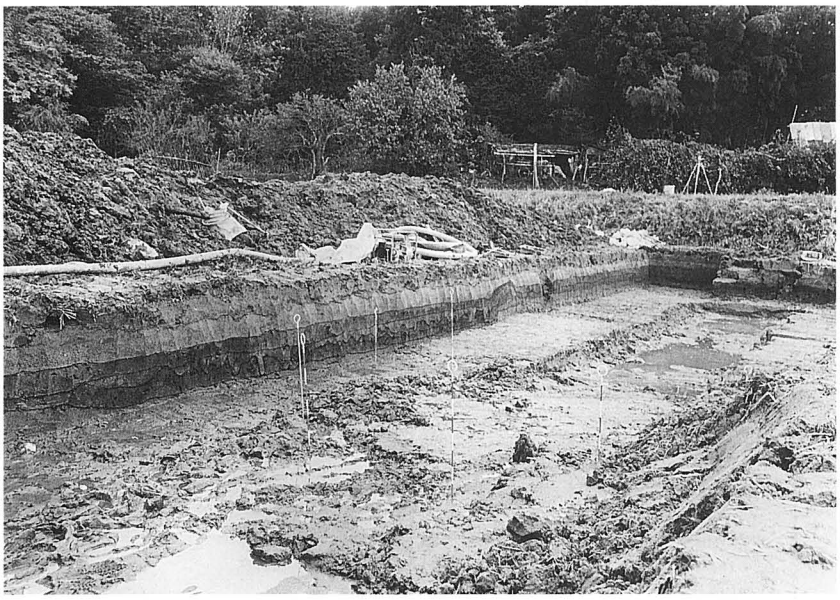
宮城町誌編纂委員会1969：「宮城町誌　本編」宮城町

紫桃正隆　1973：「史料　仙台領古城・館　第３巻」宝文堂

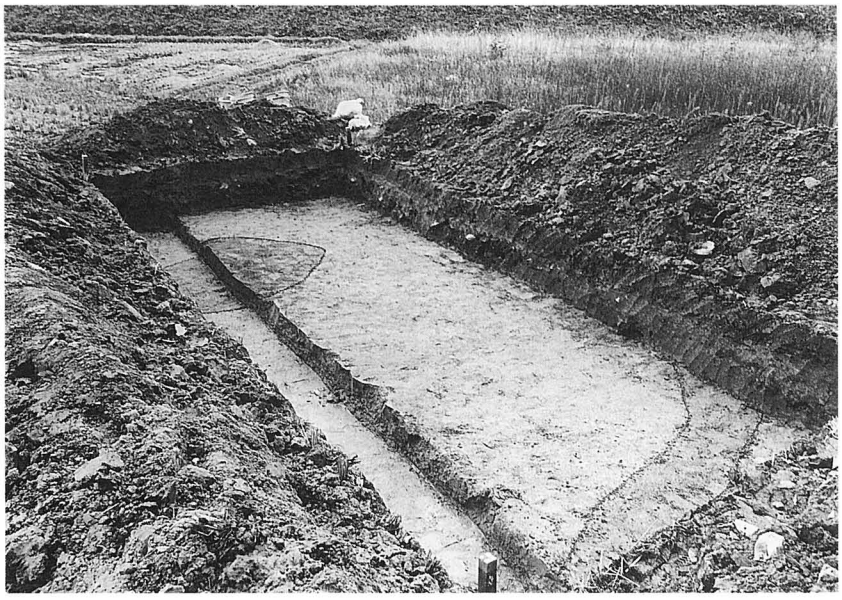
図版14　成館跡航空写真

図版15　第１トレンチ全景

図版16　第１トレンチ断面

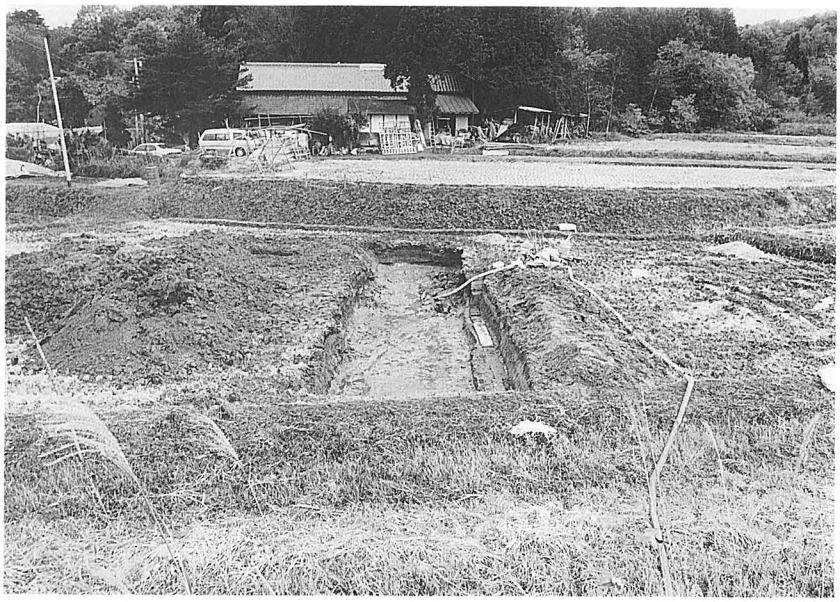


図版17　第２トレンチ全景



図版18　第２トレンチ断面

図版19　第３トレンチ



図版20　第３トレンチ断面

報告書抄録

ふりがな	せんだいへいや　　いせきぐん
書名	仙台平野の遺跡群
副書名	平成8年度発掘調査報告書　燕沢遺跡第10次調査など
巻次	XVI
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書
シリーズ番号	第216集
編著者名	篠原信彦、長島榮一、竹田幸司、豊村幸宏、森剛男
編集機関	仙台市教育委員会
所在地	〒980-71 宮城県仙台市青葉区国分町三丁目7－1　TEL022-214-8893～8894
発行年月日	1997年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
つばめさわいせき 燕沢遺跡	みやぎけんせんだいしみやぎのく 宮城県仙台市宮城野区 つばめさわひがし 燕沢東三丁目他	04100	01001	38° 17′ 10″	141° 12′ 00″	19960422 ～19960624	400m²	重要遺跡の範囲確認
こおりやまいせき 郡山遺跡	みやぎけんせんだいし 宮城県仙台市 たいはくくこおりやま 太白区郡山三丁目他	04100	01003	38° 13′ 13″	141° 18′ 30″	19961209	10m²	個人住宅建築工事
なるたてあと 成館跡	みやぎけんせんだいしあおばく 宮城県仙台市青葉区 いもざわあざこまごめ 芋沢字駒込	04100	21106	38° 18′ 20″	141° 45′ 44″	19961105 ～19961115	140m²	土地改良工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
燕沢遺跡	寺院跡	平安	柱列・溝跡 竪穴遺構・土坑	土師器・須恵器 赤焼き土器・縄文土器 瓦・石器・鉄滓	
郡山遺跡	官衙跡	古墳 ～ 奈良	なし	なし	
成館跡	城館跡	中世	土坑・溝跡	なし	

仙台市文化財調査報告書第216集

仙台平野の遺跡群 XVI

－平成８年度発掘調査報告書－

燕沢遺跡第10次調査など

1997年３月

発行　仙台市教育委員会

仙台市青葉区国分町三丁目７－１

文化財課 022(214)8893

印刷　株式会社 東北プリント

仙台市青葉区立町24－24

TEL 263-1166